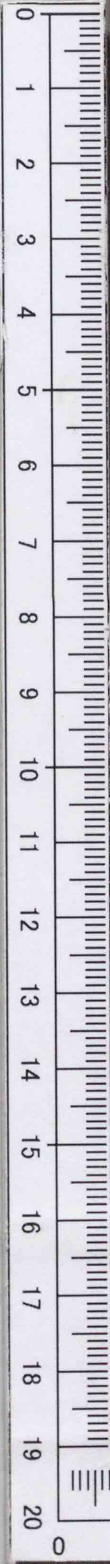
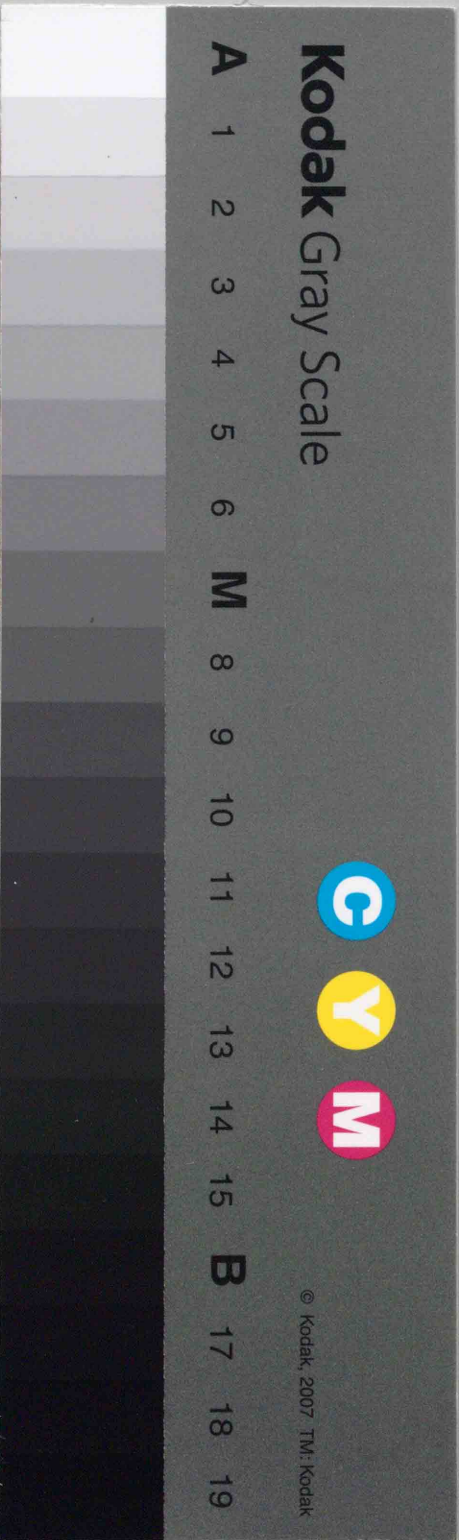
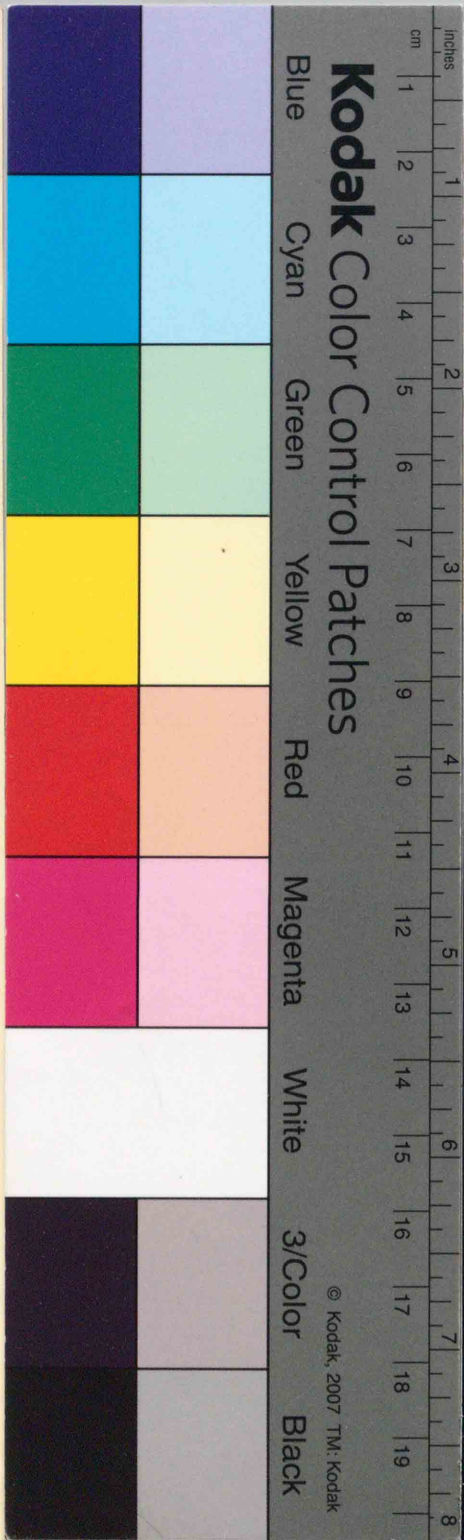


41071

教科書文庫

| |
|----------------|
| 4 |
| 760 |
| 52-1930 |
| 013af 49400 |




文庫
930
9400



中央図書館

| |
|------------|
| 教科書文庫 |
| 4 |
| 760 |
| 52-1930 |
| 0130449400 |

b 四上五下 b


昭和五年三月四日

文部省検定済

師範學校・高等女學校音樂科教科用

b b b b
 FL: 7.473

現代音樂通論

小笠原良造着



広島大学図書
 0130449400


東京廣文堂書店発行

広島大学図書

0130449400



歌 劇



タンノイザーの舞臺面 (第二幕)



ディマイスタージンガー フォン ニュールンブルヒの舞臺面 (第三幕)

緒 言

本書は師範學校及び高等女學校その他中等程度の諸學校に於ける音樂科教科用書に充てるために編纂したものである。

本書は從來採用されてゐる樂典教科書と異なり、樂典事項の説述は勿論、實際音樂の理解と鑑賞とに必要な諸事項をも併述して、こゝに現代音樂通論と名づけたのである。

各論とも、その叙述はこれを成るべく平易簡明を旨とし、また教授事項は前後の關係を充分考慮して配列したのであるが、實際教授に際しその運用を適宜に處置されることを望む。

なほ樂曲の解説は蓄音機を使用してレコードに依り、または教師の實演によつて實地に指導せられたならば、一層その効果の確實を期することが出來ようと思ふ。

編 者 識

現代音樂通論

目次

| | |
|--------------|---|
| 第一章 音樂論 | 1 |
| 1. 音樂 | 1 |
| 2. 樂音 | 1 |
| 3. 音名 | 1 |
| (1) 音名 | 1 |
| (2) 半音程及び全音程 | 2 |
| (3) 八音 | 2 |
| 4. 音樂の種類 | 3 |
| (1) 聲樂 | 3 |
| (2) 器樂 | 3 |
| 第二章 樂譜論 | 5 |
| 1. 樂譜 | 5 |
| 2. 樂譜法 | 5 |
| 3. 譜表 | 5 |
| (1) 譜表 | 5 |
| (2) 加線 | 6 |
| 4. 音部記號 | 6 |

| | |
|-----------------|----|
| 5. 各種の譜表 | 7 |
| (1) 單純譜表 | 7 |
| (2) 複合譜表 | 7 |
| 6. 音符 | 9 |
| (1) 單純音符 | 9 |
| (2) 附點音符 | 10 |
| 7. 休止符 | 10 |
| (1) 單純休止符 | 11 |
| (2) 附點休止符 | 11 |
| (3) 大空音符及び大空休止符 | 12 |
| 8. 縦線及び小節 | 12 |
| (1) 縦線 | 12 |
| (2) 小節 | 12 |
| 9. 拍子 | 13 |
| 10. 拍子の種類及び拍子記號 | 3 |
| (1) 二拍子 | 13 |
| (2) 三拍子 | 13 |
| (3) 四拍子 | 13 |
| (4) 六拍子 | 14 |
| 11. 變拍子 | 14 |
| 12. 切分音 | 15 |

| | |
|---------------------|----|
| 13. 正格及び變格小節 | 15 |
| 14. 拍法 | 16 |
| (1) 拍法 | 16 |
| (2) 指揮棒にて示す拍法 | 16 |
| 15. 變化記號及び本位記號 | 17 |
| (1) 嬰記號、變記號、本位記號 | 17 |
| (2) 嬰變兩記號の效力 | 18 |
| (3) 重嬰及び重變記號 | 18 |
| 16. 速度標語及び拍節機 | 19 |
| (1) 速度標語 | 19 |
| (2) 拍節機 | 20 |
| 17. 發想記號 | 20 |
| (1) 演奏上の氣分を示す標語 | 21 |
| (2) 強弱に關する標語 | 21 |
| (3) 他語に附して意味を限定する標語 | 22 |
| 18. その他の記號及び標語 | 22 |
| (1) 圓點及び垂點 | 23 |
| (2) 連結線 | 23 |
| (3) 結合線 | 23 |
| (4) 延長記號 | 23 |
| (5) 樂器使用上特に用ひられる諸記號 | 24 |

19. 記譜省略法.....25

 (1) 小節に關する省略法.....25

 (2) 音符に關する省略法.....26

20. 裝飾音.....26

 (1) 長倚音.....27

 (2) 短倚音.....27

 (3) 複倚音.....27

 (4) 滑奏音.....28

 (5) 回音.....28

 (6) 漣音.....29

 (7) 顫音.....29

 (8) 琵琶音.....30

第三章 音程論.....31

 1. 音程.....31

 2. 音程の數へ方.....31

 3. 全音階的音程.....31

 4. 半音階的音程.....33

 5. 音程の轉回.....34

 6. 音程の協和及び不協和.....35

 7. 協和音程の種別.....35

 8. 協和音程に屬する諸音程.....36

9. 不協和音程に屬する諸音程.....36

第四章 音階論.....37

 1. 音階.....37

 2. 音階の種類.....37

 3. 主調音及び階名.....37

 (1) 主調音.....37

 (2) 階名.....37

 4. 長音階及びその性質.....38

 5. 基礎音階(模範音階).....38

 6. 嬰種長音階.....39

 7. 變種長音階.....40

 8. 長音階の調號.....41

 9. 短音階及びその性質.....42

 (1) 自然的短音階.....42

 (2) 和聲的短音階.....42

 (3) 旋律的短音階.....43

 10. 嬰種短音階.....44

 11. 變種短音階.....45

 12. 短音階の調號.....46

 13. 長短兩音階の關係.....47

 14. 移調.....48

| | |
|----------------------|----|
| 15. 半音階 | 48 |
| 16. 邦樂調音階 | 48 |
| (1) 律旋法 | 49 |
| (2) 陰旋法 | 49 |
| 第五章 和聲論 | 51 |
| 1. 和聲及び和絃 | 51 |
| 2. 三和音 | 51 |
| 3. 三和音の種類 | 51 |
| 4. 長短兩音階各度の三和音及びその名稱 | 52 |
| 5. 普通和絃 | 53 |
| 6. 人聲の區域 | 53 |
| 7. 和絃の重複及び省略 | 53 |
| 8. 和絃の轉回 | 54 |
| 9. 和絃進行の三形態 | 54 |
| 10. 和絃進行上の連續に關する法則 | 55 |
| (1) 旋律的進行について | 55 |
| (2) 和聲的進行について | 56 |
| 11. 七の和絃 | 57 |
| 12. 屬七の和絃 | 57 |
| 13. 屬七の和絃の轉回 | 57 |

| | |
|-----------------|----|
| 14. 屬七の和絃の解決 | 58 |
| 15. その他の七の和絃の解決 | 58 |
| 16. 終止法 | 58 |
| (1) 完全終止 | 59 |
| (2) 半終止 | 59 |
| (3) 變格終止 | 59 |
| (4) 擬終止 | 59 |
| 17. 轉調 | 60 |
| 18. 側近調 | 60 |
| 19. 轉調の法則 | 61 |
| 20. 分散和絃 | 61 |

附 錄

第一章 樂式論

| | |
|--------------|----|
| 1. 樂式 | 63 |
| 2. 樂曲構成の基本材料 | 63 |
| (1) 節奏 | 63 |
| (2) 動機 | 63 |
| (3) 小樂節 | 64 |
| (4) 大樂節 | 65 |
| 3. 樂曲の基本形式 | 66 |

| | |
|-----------------|-----------|
| (1) 一部分形式 | 66 |
| (2) 二部分形式 | 66 |
| (3) 三部分形式 | 66 |
| 4. 楽曲の諸形式 | 70 |
| (1) 歌謡形式 | 70 |
| (2) 複合三分部形式 | 70 |
| (3) ロンド形式 | 70 |
| (4) ソナータ形式 | 71 |
| (5) 變奏曲 | 72 |
| (6) 組曲 | 72 |
| (7) 幻想曲 | 73 |
| 5. 重なる楽曲の略説 | 73 |
| (1) 聲楽曲 | 73 |
| (2) 器楽曲 | 74 |
| 第二章 演奏論 | 81 |
| 1. 聲樂の演奏 | 81 |
| (1) 獨唱 | 81 |
| (2) 合唱 | 81 |
| (3) 二重唱、三重唱、四重唱 | 81 |
| (4) 歌劇 | 82 |
| 2. 器樂の演奏 | 82 |

| | |
|----------------|-----------|
| (1) 獨奏 | 82 |
| (2) 合奏 | 83 |
| (3) 吹奏樂器の合奏 | 84 |
| (4) 管絃樂器の合奏 | 84 |
| 第三章 樂器論 | 87 |
| 1. 樂器の種別 | 87 |
| 2. 絃樂器 | 87 |
| (1) ピアノ | 87 |
| (2) ハープ | 88 |
| (3) ヴァイオリン | 88 |
| (4) ヴィオラ | 89 |
| (5) ヴィオロンセロ | 89 |
| (6) ダブルバス | 89 |
| 3. 管樂器 | 90 |
| (1) 木屬管樂器 | 90 |
| (2) 金屬管樂器 | 91 |
| 4. オルガン(風琴) | 92 |
| (1) アメリカンオルガン | 93 |
| (2) ハーモニウム | 93 |
| (3) ベダルオルガン | 93 |
| (4) バイブオルガン | 94 |

5. 擊奏樂器95

(1) テンパニ95

(2) ドラム95

(3) シンバル95

— 口繪・挿畫 —

○歌劇 卷頭

○混聲合唱 80, 81

○ピアノ獨奏 82, 83

○ヴァイオリン獨奏 82, 83

○弦樂四重奏 82, 83

○ピアノ 86, 87

○ハープの演奏 88, 89

○絃樂器 88, 89

○木屬管樂器 90, 91

○金屬管樂器 90, 91

○アメリカンオルガン 92, 93

○パイプオルガンの全景とその演奏 94, 95

○擊奏樂器 94, 95

現代音樂通論

第一章 音樂論

1. 音樂

單一な樂音が進行し、又は數個の樂音が重複進行して、吾々に何らかの美的感情を惹起せしめ、もしくは詩的内容を想起せしめるときはこれを音樂といふ。

2. 樂音

一定時に定數の振動をなすことによつて生ずる愉快な音を樂音といふ。然らざるものを噪音といふ。

3. 音名

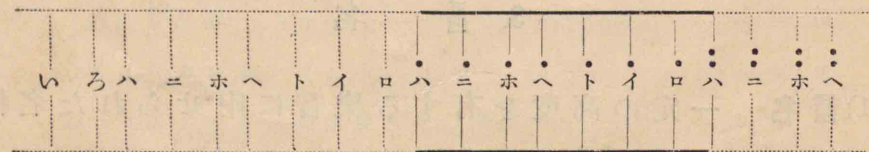
(1) 音名 一定の高度を有する樂音に附せられた名稱を音名といふ。その名稱は次のやうである。

| | | | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|---|---|
| 日本 | ハ | ニ | ホ | ヘ | ト | イ | ロ |
| 英米 | C | D | E | F | G | A | B |
| 獨逸 | C | D | E | F | G | A | H |

音楽に用ひられる音は、その数が極めて多い。併し性質の異なるものは前記の七音のみで、他は全くこの七音と倍数の高度関係をもつて反復重用せられる。そして高度の異なる同名の音は文字の上下に小点を附し、なほ大字、小字、或はイロハ……トの書體を變じてこれを表はす。

下一點八音 大字八音 小字八音 上一點八音(中央八音) 上二點八音
 へといろ はにほへといろ ハニホヘトイロ ハニホヘトイロ ハニホヘト

(2)半音程及び全音程 前述の各樂音の順列においてその音間に距離の廣狹がある。ロハの間及びホへの二音間は狭く、これを半音程といひ、他の音間は廣くこれを全音程といふ。



(3)八音 (Octave) 或音より上又は下の八番目の同名音への距離をオクターブといひ、そのへだたりを有する音を原音のオクターブの音といふ。

4. 音楽の種類

音楽には人聲によつて唱謠せられる聲樂と、樂器によつて奏せられる器樂との二種ある。

(1)聲樂 には獨唱、合唱及び二重唱、三重唱、四重唱などの別がある。

(2)器樂 にもまた各種樂器の獨奏、二重奏、三重奏、四重奏及び管絃樂器の合奏などがある。

なほ音楽の種類については、第七章演奏論において詳述する。

第二章 樂譜論

1. 樂譜

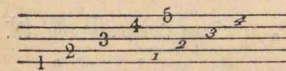
音樂を諸種の記號によつて記したものを樂譜といふ。

2. 樂譜法

樂譜の諸記號及びこれに關する作用について説明したものを樂譜法といふ。以下樂譜法について述べる。

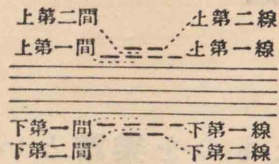
3. 譜表

(1) 譜表 音符及びその他の記號を書き記す五條の並行横線を譜表といふ。譜表はその線及び間を併用し、下より上に順次數へる。線及び間の名稱は下のやうである。



| | | | |
|------|------|------|------|
| 線の名稱 | 第一線。 | 第二線。 | 第三線。 |
| | 第四線。 | 第五線。 | |
| 間の名稱 | 第一間。 | 第二間。 | |
| | 第三間。 | 第四間。 | |
| | | | |


(2)加線 譜表の上又は下に必要に応じて加線と稱する短線を附加して音符記載の位置を増加することがある。そして譜表の上にあるものは下より、譜表の下にあるものは上よりその位置を数へる。



4. 音部記號

譜表上に音の位置を定めなほ音の部屬をも示すため常に譜表の始に記載する記號を音部記號といふ。

音部記號に下の三種ある。



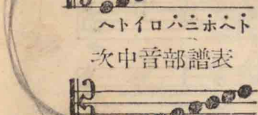
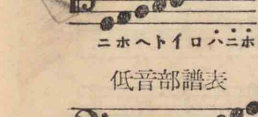
| | |
|---|---------------------------|
|  | ト音記號……高音部記號 |
|  | ハ音記號…… 中音部記號 次中音部記號 |
|  | ヘ音記號……低音部記號 |

ト音部記號はその主要部を第二線に、ハ音部記號はその主要部を第三線(中音部記號のとき)又は第四線(次中音部記號のとき)に置く。ヘ音部記號はその主要部を第四線に置き、各その主要部のト音、ハ音、ヘ音なることを示す。

5. 各種の譜表

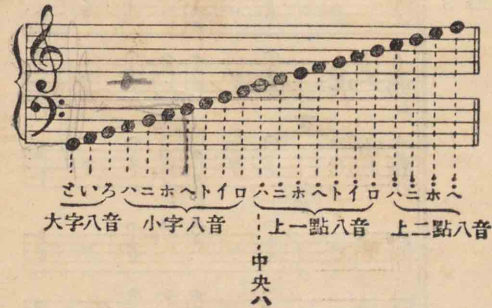
譜表には單純譜表と複合譜表とある。

(1)單純譜表には次の數種ある。

| | | |
|---|--------|------------|
|  | 高音部譜表 | 高音部記號を有す。 |
|  | 中音部譜表 | 中音部記號を有す。 |
|  | 次中音部譜表 | 次中音部記號を有す。 |
|  | 低音部譜表 | 低音部記號を有す。 |

(2)複合譜表には大譜表と各種の連合譜表とがある。

(a)大譜表 高低兩音部譜表を中央にハ音を挿みて重ね、縦線と弧線とにて連ねたものを大譜表といふ。



大譜表は重音唱歌並に有鍵樂器(オルガン、ピアノ)などの樂曲を記載するに用ひる。

(b)連合譜表 單純譜表を三個以上連結したも

獨唱又は
獨奏譜表

管絃樂總譜表

Ouverture zur Oper
Die Zauberflöte Mozart

のを連合譜表といふ。連合譜表には獨唱曲、又は獨奏曲などに伴奏を附したものの、或は合唱、合奏などに用ひる總譜表(Score)など、その種類が多い。

6. 音符

樂音の長短を表はす記號を音符といふ。音符はその形狀によつて歷時の長短を表はし、譜表に記される位置によつてその高度を示すものである。

音符には單純音符と附點音符との二種ある。

(1) 單純音符 普通用ひられるものは、四分音符を一拍とすれば次のやうである。

- 全 音 符……………四拍。
- ◐ 二 分 音 符……………二拍。
- ◑ 四 分 音 符……………一拍。
- ◒ 八 分 音 符……………一拍の二分の一。
- ◓ 十 六 分 音 符……………一拍の四分の一。
- ◔ 三 十 二 分 音 符……………一拍の八分の一。

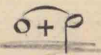
音符の各部の名稱。





(2)附點音符 單純音符の右側に小點を附したものを附點音符といふ。


附點音符には單附點音符と複附點音符とある。

(a)單附點音符 は通例單に附點音符と稱し、その形状及び名稱は下のやうである。

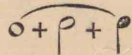
○ 附點全音符……………六拍 

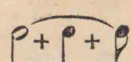
♩ 附點二分音符……………三拍 

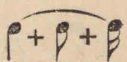
♪ 附點四分音符……………一拍と二分の一。 

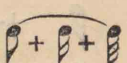
♩ 附點八分音符……………一拍の四分の三。 

(b)複附點音符 の種類は次のやうである。

○○ 複附點全音符 …… 七拍。 

♩ 複附點二分音符 …… 三拍半。 

♩ 複附點四分音符 …… 一拍と四分の三。 

♩ 複附點八分音符 …… 一拍の八分の七。 

7. 休止符

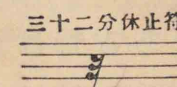
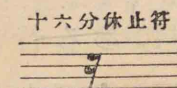
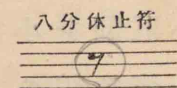
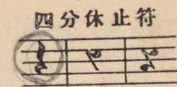
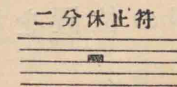
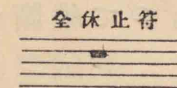
樂曲の進行中、樂音の休止を示す記號を休止符とい

ふ。休止符はその形状によつて休止歴時の長短を區別する。

休止符にも亦單純休止符と附點休止符とがある。

(1)單純休止符 には下の如く全休止符、二分休止符、四分休止符、八分休止符、十六分休止符、三十二分休止符などの種類がある。


(2)附點休止符 單純休止符の右側に小點を附したものを附點休止符といひ、その一點を附したものを單附點休止符、二點を有するものを複附點休止符といふ。



そして休止符の歴時は、四分休止符を一拍とすれば次のやうである。即ち
全休止符……………四拍。
二分休止符……………二拍。
四分休止符……………一拍。
八分休止符……………半拍。
十六分休止符……………四分の一拍。
附點休止符の拍數もこれから推して
知ることが出來よう。

(3) 大全音符及び大全休止符

音符及び休止符には以上の外、稀に大全音符及び大全休止符と稱するものを用ひることがある。



大全音符と大全休止符との歴時は全音符及び全休止符の二倍である。

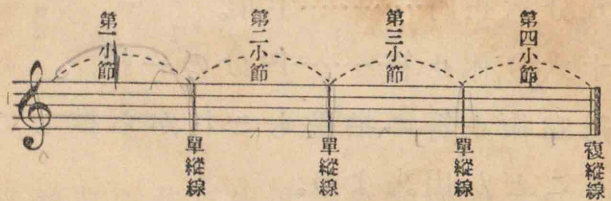
8. 縦線及び小節

(1) 縦線 譜表を一條又は二條の直線をもつて縦斷する。この直線を縦線といふ。

(a) 單縦線(小節縦線)は樂曲中樂音の強弱の位置を明かにし、歴時を等一な部分に區分する。

b) 複縦線 は主として樂曲の段落又は終結を表はすに用ひられる。

(2) 小節 單縦線によつて、區分せられた小區間を小節といふ。各小節の歴時は皆相等しく、且小節縦線の右側にある音は強聲部で、左側にある音は弱聲部である。



9. 拍子

樂曲の進行における樂音は、一定時に一定の強弱をなして表はれる。この樂音の一定の強弱の表はれを拍子といふ。

10. 拍子の種類及び拍子記號

(1) 二拍子 各小節とも二拍の拍數を有し、強弱が交互進行をなすものである。普通用ひられるのは二分の二拍子、四分の二拍子の二種であつて、前者は $\frac{2}{2}$ 又は C 、後者は $\frac{2}{4}$ の記號を用ひる。



(2) 三拍子 各小節とも三拍の拍數を有し、強弱弱の進行をなすものである。普通用ひられるのは四分の三拍子と八分の三拍子の二種であつて、 $\frac{3}{4}$ 、 $\frac{3}{8}$ の記號を用ひる。



(3) 四拍子 各小節とも四拍の拍數を有し、二拍子を重



4/4 又は C, 後者は 4/8 の記號を用ひる。

(4) 六拍子 は三拍子を重複したものであつて、各小節



分の六拍子の二種であつて、6/4、6/8 の記號を用ひる。

複した強弱の進行をなすものであるが、第三拍の強聲部は第一拍の強聲部ほど強くない。普通用ひられるのは四分の四拍子、八分の四拍子の二種であつて、前者は

とも六拍の歷時をもつて進行するものである。そしてその第四拍の強聲部は第一拍の強聲部よりやや弱いのである。普通用ひられるのは四分の六拍子及び八

11. 變拍子

樂曲進行において拍子上に變化を與へるために四分音符三個を二分音符一個の歷時に、八分音符三個を四分音符一個の歷時に奏唱せしめることがある。これを變拍子といふ。そしてこの三個の音符には3の

三連音符



數字を附して連結し、他の音符との區別を明かにする。この三個の音符を三連音符といふ。なほこの外、五個音符を連ねた五變拍子、七個音符を連ねた七變拍子などもあつて、5及び7の數字と弧線をもつて表はすことは三連音符と同様である。

12. 切分音

樂曲中の弱聲部と次の同度の強聲部とを弧線をもつて結合した時は、これを切分音と稱へる。



切分音は始の音に次の音の強聲が轉位する。そして結合した二個音符はその音長を合はせた歷時をもつて一個音符のやうに奏するものである。

13. 正格及び變格小節

楽曲は多く第一強拍部より始めるのが普通である

變格小節



けれども、又他の拍部より始めることもある。第一強聲部より始まる時は、これを正格小節といひ、他の拍部より始まる時はこれを變格小節といふ。變格小節の拍數は常に最終小節の拍數と合して一小節分の定拍數となるものである。

14. 拍法

(1)拍法 楽曲進行においてその拍子を正確ならしめるため拍數を數へる法がある。これを拍法といふ。

拍法には下の數種ある。

- (a)踏節法 足踏をもつて數へる法。
- (b)拍節法 手を打つて數へる法。
- (c)呼節法 口で拍數を唱へて數へる法。

その他指揮棒をもつて拍數及び強弱などの發想をも併せ示す法もある。

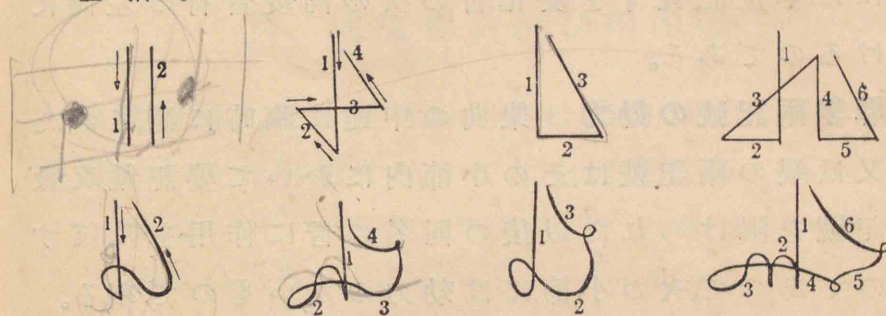
(2)指揮棒にて示す拍法 は次のやうである。

二拍子

四拍子

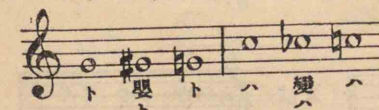
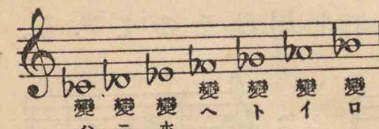
三拍子

六拍子



15. 變化記號及び本位記號

(1)嬰記號變記號本位記號 本位の或音を半音程高くするには嬰記號#をその音符の左側に附記し、又は半音程低くするには變記號bをその音符の左側に附記する。



そしてこの兩記號によつて變化した音はそれぞれ嬰ハ、嬰ニ……又變ハ、變ニ……と本來の音名に嬰及び變の語を冠して呼ぶのである。この兩記號によつて一旦半音程高く、或は低く變化した音を本位音に復せしめ

るには本位記號を變化音の次の同度音符の左側に付けるのである。

(2)嬰變兩記號の効力 樂曲の中途に臨時に記された嬰又は變の兩記號は、その小節内において嬰記號又は變記號を付けられた以後の同名の音に作用を及ぼすものであつて、次の小節には効力のないものである。そして樂曲の首に調子記號として集記し、更に調子記號を變ぜざる場合は、全曲を通じて同名の音にその作用を及ぼすのである。

(3)重嬰及び重變記號 一旦嬰音となつた音をなほ半音程高くするには重嬰記號×を用ひ、一旦變音となつた音を更に半音程低くするには重變記號yを用ひる。重嬰音及び重變音を單嬰音及び單變音となすには#を用ひるか、又は單嬰單變としてもよい。そして更に本位音に復するには何れもyを用ひるのである。



16. 速度標語及び拍節機

(1)速度標語 樂曲進行の速度は樂曲の始に多く伊太利語をもつて示される。これを速度標語といふ。

| 標語 | 意義 |
|------------------------------|----------------------|
| Lento. (レント)..... | 徐々に。 |
| Largo. (ラルゴ)..... | 遅く。(幅廣く) |
| Larghetto. (ラルゲット)..... | 遅く。(ラルゴよりややく早く) |
| Adagio. (アダチオ)..... | 遅く。(アンダンテよりやや遅く) |
| Andante. (アンダンテ)..... | ややく遅く。(併歩調) |
| Andantino. (アンダンティーノ)..... | ややく遅く。(アンダンテより少しく速く) |
| Moderato. (モデラート)..... | 中庸に。(程よき速さに) |
| Allegretto. (アレグレット)..... | ややく快速に。(アレグロより遅く) |
| Allegro. (アレグロ)..... | 急速に(活潑に) |
| Presto. (プレスト)..... | 急速に。(アレグロより速く) |
| Prestissimo. (プレスティッシモ)..... | 極めて迅速に。(出来るだけ速く) |

樂曲の中途において一部分の速度を變更する時には次の標語を用ひる。

| 略字 | 標語 | 意義 |
|-------|--------------------------|--------|
| rit. | ...ritardando (リターダンド) | 次第に遅く。 |
| rall. | ...rallentando. (ラレンタンド) | 次第に遅く。 |

riten...ritenuto.(リテヌート).....抑止しつゝ。

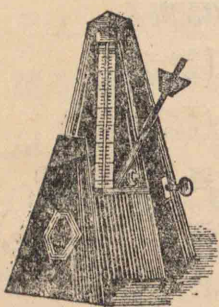
一時變更した速度を本來の速度に復する時には左の標語を用ひる。

標語

意義

a tempo. (アテンポ).....本來の速度に。

(2) 拍節機 樂曲の速度を正確に計る機械がある。こ



れを拍節機メトロノーム(metronome)といふ。樂曲の始に ♩ = 120 とあらば拍節機振子の上邊を中央の數字盤の 120 と記せる處と同じ高さに置いて動かす時は、振子は一分間に百二十の速度で左右に運動をなす。この左又は右の單振動の時間をもつて

四分音符一個を奏するものと知るべきである。

樂曲の始に M. M. = 120 とあるはメルツェル氏のメトロノームによつて一分間に百二十の四分音符を奏すべきことを表はしたものである。

17. 發想記號

樂曲演奏上その氣分を示し、又は樂曲一部の強弱に

關する奏法を指示する記號を發想記號といふ。

(1) 演奏上の氣分を示す標語

標語

意義

Agitato. (アヂタート).....性急に。

Animato. (アニマー托).....生氣を以て。

Cantabile. (カンタービレ).....謠ふが如く。

Con moto. (コンモート).....感動の情を以て。

Con brio. (コンブリオ).....生氣を以て。

Dolce. (ドルツェ).....柔かに。

Fuoco. (フォーコ).....熱情を以て。

Grazioso. (グラチオーゾ).....優雅に。

Legato. (レガート).....滑らかに。

Maestoso. (マエストーゾ).....威嚴を以て。

Scherzando. (スケルツァンド).....嬉戲の心持にて。

Tranquillo. (トランクイロ).....穏やかに。

Vivace. (ヴィヴァーツェ).....元氣よく。

(2) 強弱に關する標語

記號


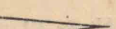
標語

意義

pp.pianissimo.(ピアニッシモ).....最も弱く。

p.piano.(ピアノ).....弱く。

mp.mezzo piano.(メツォピアノ).....やゝ弱く。

- mf.mezzo forte.(メツォフォルテ).....やゝ強く。
- f.forte.(フォルテ).....強く。
- ff.fortissimo.(フォルテッシモ).....最も強く。
- cresc. ...crescendo.(クレッシェンド) }次第に強く。
- 
- decresc. ...decrescendo. ... (デクレッシェンド) }次第に弱く。
- 
- dim.diminuendo.(デイミヌエンド)次第に弱く。
- sf.sforzando.(スフォルツァンド) }特に強く。
- ^ 又は < >
- fp.fortepiano.(フォルテピアノ)音頭を強く
直ちに弱く。

(3) 他語に附して意味を限定する標語

| 標 語 | 意 義 |
|--------------------|-------|
| assai.(アッサイ) | 甚だ。 |
| meno.(メノ) | より少く。 |
| molto.(モルト) | 頗る。 |
| poco.(ポコ) | 少し。 |
| più.(ピュー) | 更に多く。 |

18. その他の記號及び標語

(1) 圓點及び垂點 音符の上又は下に圓點・(staccato) 又は垂點 ∇ (staccatissimo) と稱する記號を有する時は短く、且鮮明に奏するものであつて、垂點は圓點より一層短く奏すべきものである。

圓 點



垂 點



(2) 連結線 (Slur) 高度を異にせる二個以上の音符に亘る弧線であつて、この線のかかれる數音は圓滑流暢に奏すべきものである。

(3) 結合線 (Tie) 高度を同じうせる二個音符又は數個音符を結合せる弧線であつて、その奏法は切分音の章において説明した。

連 結 線



結 合 線



(4) 延長記號 (Pause) 音符及び休止符の上又は下に附された弧線内に一小點を有する記號 \circ を延長記號とい

ふ。そして、この記號の附した音符又は休止符は、その
 延長記號 本來の歷時よりも適當の長さに延長
 するものである。なほこの記號の複
 縦線の上に置かれた時は他の意味を
 表はすものであるが、これは後章において述べる。



(5) 樂器(オルガン、ピアノ、ヴァイオリン)使用上特に用ひら
 れる諸記號

| 記號 | 標語 | 意義 |
|-------|---|-----------------------------------|
| R.H. | (Right Hand) <small>ライト ハンド</small> | (英) |
| M.D. | (Main Droite) <small>マアン ドロアト</small> | (佛) |
| | (Mano Destra) <small>マノ デストラ</small> | (伊) |
| L.H. | (Left Hand) <small>レフト ハンド</small> | (英) |
| M.G. | (Main Gauche) <small>マアン ゴウシユ</small> | (佛) |
| M.S. | (Mano Sinistra) <small>マノ シニストラ</small> | (伊) |
| Ped. | (Pedal) <small>ペダル</small> | ピアノの右の踏子を踏む記號。 |
| ⊗ | | 踏みたるペダルを元の位置に戻す記號。 |
| Pizz. | (Pizzicato) <small>ピッチカート</small> | ヴァイオリン奏法において弓を用ひずに、右手食指で絃を彈奏する記號。 |

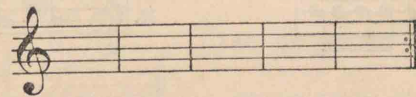
Col arco...コルアルコ.....弓を以ての義。
 ▮又は|.....下行弓 ダウン ボウ Down bowの義。
 V又は/.....上行弓 アップ ボウ Up bowの義。

19. 記譜省略法

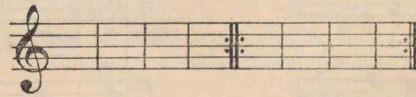
樂曲中同一な小節又は同種音符の連續する場合に
 記號によつてこれを反復せしめる法を省略法といふ。

(1) 小節に關する省略法

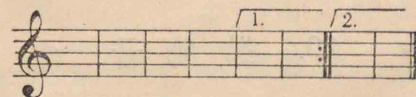
(a) 全部反復



(b) 前後兩半部を各反復



(c) 反復進行の際1.を奏せず2.に進行する。



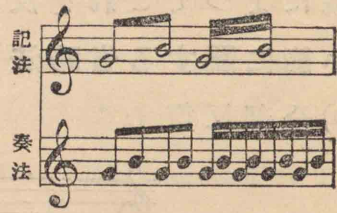
(d) 後の※より始の※に復り♯の處で終る。



(e) D. C. (Da Capo) の記號より始に復り Fine. の處で終る。



(2) 音符に関する省略法



20. 裝飾音

樂曲の旋律に興味を添へるため音符に更に小音符又は他の記號を附して奏法を變化せしめることがある。これを裝飾音といふ。裝飾音の奏法はその様式

頗る多種類であるけれども、こゝでは普通用ひられるもの數種について述べる。

(1) 長倚音 主音符の前に記された小音符であつて、その奏法は單純音符に附されたときは主音符の二分の一の音長を借り、主音符が附點音符なるときはその三分の二の音長を借りて奏するものである。



短倚音



(2) 短倚音 主音符の前にある符尾及び符鉤を貫く斜線を有する小音符であつて、極めて迅速明快に奏すべきもので主音符よりその歷時をとるものである。

複倚音



(3) 複倚音 主音符より二度上及び二度下、或は主音符の二度下及び二度上の二個の小音符の附せるものを複倚

滑 奏 音

記法

奏法

記法

奏法

音といふ。これは極めて迅速に奏すること、短倚音の場合と同じである。

(4)滑奏音 主音符の前に順次的に続く二個又は三個の小音符を滑奏音と稱する。その奏法は極めて速く主音符に滑奏せしめるのである。

(5)回音 數個の小音符又は∩などの記號をもつて示される。

主音の上より始まる例

記法

奏法

主音の下より始まる例

記法

奏法

變化音を含める例

記法

奏法

單純音符を主音符とせる直後に回音のある場合

記法

奏法

附點のある主音符の直後に回音のある場合

記法

奏法

回音の奏法は以上述べた外なほ多種類あるけれども、こゝには最も普通に行はれてゐるもののみを採用した。

(6)連音 w 又はwの記號を有し、wはその奏法主音符

連 音

記法

奏法

記法

奏法

とその上位の音とが迅速に奏せられ、wは主音とその下位の音とて奏すべきものである。

(7)顫音 tr の記號を有し、その奏法は主音とその上位音とを迅速かつ平等に數回反復して奏すべきものである。

顫音の上行の際は終に回音を附するを常とする。

顫音を奏する速さは楽曲の性質によつて一定しない。しかし主音符の示す歴時内においてなすべきものである。

主音符より始まる例

終に音同のある例

主音符の前の倚音より始まる例

數音符に亙つて顫音の繼續する例

(8) 琵琶音 和音の前に記された波状をなした記號、即ち

琵琶音

を琵琶音といふ。その奏法は和音を同時に奏することなく、低音より順次神速に和音の最上音に至つて定歴時を保つのである。

第三章 音程論

1. 音程

同時に響く二音又は或音より他の音に至る距離(高度の差)を音程といふ。

2. 音程の數へ方

譜表の線及び間は各一度の位置を有するものであるから、互に相接する線と間との距離はこれを二度と數へる。そして多くの場合、上方に三度、四度、五度……と數へるのである。

音程の數へ方

3. 全音階的音程

全音階(長短)中の或二音間に生ずる音程を全音階的音程といひ、その數十四個ある。種類によつて完全長

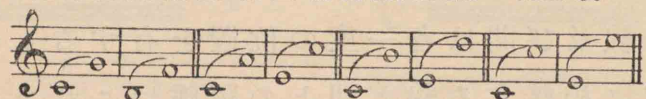
短増減などの語をその音程數の上に冠して稱へる。
例へば長三度、短六度、完全五度などといふ。

十四個の全音階的音程

完全一度 長二度 短二度 長三度 短三度 完全四度 増四度



完全五度 減五度 長六度 短六度 長七度 短七度 完全八度



| 音程名 | 含まれる全音及び半音の數 |
|------|--------------|
| 完全一度 | 二個の音は同度音である。 |
| 長二度 | 全音 一。 |
| 短二度 | 半音 一。 |
| 長三度 | 全音 二。 |
| 短三度 | 全音 一、半音 一。 |
| 完全四度 | 全音 二、半音 一。 |
| 増四度 | 全音 三。 |
| 完全五度 | 全音 三、半音 一。 |
| 減五度 | 全音 二、半音 二。 |

| | |
|------|------------|
| 長六度 | 全音 四、半音 一。 |
| 短六度 | 全音 三、半音 二。 |
| 長七度 | 全音 五、半音 一。 |
| 短七度 | 全音 四、半音 二。 |
| 完全八度 | 全音 五、半音 二。 |

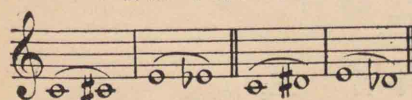
譜表上二度に亘る半音を全音階的半音といひ變化記號によつて同度に生ずる半音を半音階的半音といふ。

4. 半音階的音程

變化記號によつて全音階的音程を半音増減して生じた音程を半音階的音程といふ。かゝる音程は必ず増又は減の語を冠せしめる。即ち完全及び長音程の擴大せられた時は増音程となり、完全及び短音程の縮小せられた時は減音程となる。

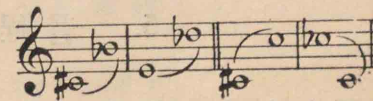
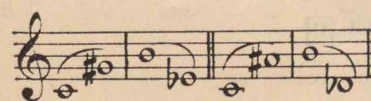
半音階的音程(増)

半音階的音程(減)



増一度 増二度

減三度 減四度



増五度 増六度

減七度 減八度

| | |
|-----|-----------------------------------|
| 音程名 | 含まれる全音及び半音の種類とその数 |
| 増一度 | 半音階的半音 一。 |
| 増二度 | { 全音 一。 半音階的半音 一。 |
| 減三度 | 全音階的半音 二。 |
| 減四度 | { 全音 一。 全音階的半音 二。 |
| 増五度 | { 全音 三。 全音階的半音 一。 半音階的半音 一。 |
| 増六度 | { 全音 四。 全音階的半音 一。 半音階半音 一。 |
| 減七度 | { 全音 三。 全音階的半音 三。 |
| 減八度 | { 全音 四。 全音階半音 三。 |

5. 音程の轉回

音程をなす二個音の中、上音を下方八度に、又は下音を上方八度に移し置く時はこれを音程の轉回といふ。

を上方八度に移し置く時はこれを音程の轉回といふ。

完全五度 完全四度
原 轉



長三度 短六度
原 轉



短六度 長三度
原 轉



増四度 減五度
原 轉



轉回によつて生ずる音程は原音程の完全音程は常に完全となり、長音程は短音程に、短音程は長音程に、なほ増は減に、減は増の音程となり、その度数は9の數より原音程の度数を減じたものである。

| | | | |
|----|----|---|---|
| 原 | 轉 | 原 | 轉 |
| 完全 | 完全 | 増 | 減 |
| 長 | 短 | 減 | 増 |
| 短 | 長 | | |

9 - 原音程 = 轉回音程

6. 音程の協和及び不協和

同時に奏唱する二音の調和の満足なものを協和音程といひ、然らざるものを不協和音程といふ。

7. 協和音程の種別

協和音程のうち、その調和最も完全なものを完全協和音程といひこれに次ぐものを不完全協和音程といふ。

8. 協和音程に屬する諸音程

| | | | |
|------|---|---------|--------------------------|
| 協和音程 | } | 完全協和音程 | 完全一度、完全四度。 完全五度、完全八度。 |
| | | 不完全協和音程 | 長三度、短三度。 長六度、短六度。 |

9. 不協和音程に屬する諸音程

| | | | |
|-------|---|--------------|--------------|
| 不協和音程 | } | 長二度、短二度、長七度。 | 以上の外半音階的諸音程。 |
| | | 短七度、増四度、減五度。 | |

第四章 音階論

1. 音階

一定の形式によつて或音より上方同名の音に至る八個音の一系列を音階といふ。

2. 音階の種類

音階には今日多く行はれる歐米音樂の長音階及び短音階、邦樂の雅樂調音階と俗樂調音階とがある。

3. 主調音及び階名

(1)主調音 音階の第一音を主調音といひ、主調音の音名をもつてその音階の調名とする。例へばハ音を主調音とする音階はこれをハ調音階といひ、ト音を主調音とするときはト調音階といふ。

(2)階名 音階の呼稱を階名といひ、現今多く用ひられるものは歐米の階名であつて、次のやうである。

Do Re Mi Fa So La Si Do

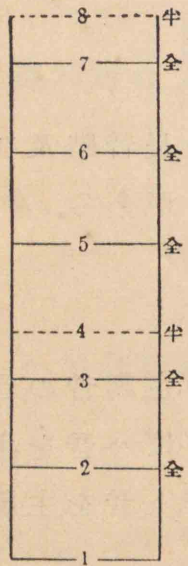
我が國には次の如き呼稱があるけれども、現今では

始んど用ひられない。

ヒー フー ミー ヨー イー ムー ナー ヒー
 1 2 3 4 5 6 7 i

4. 長音階及びその性質

八個音の音列中、第三音と第四音及び第七音と第八音との二個所に半音程を有し、他の音間は皆全音程を有する時はこれを**長音階**といふ。



長音階はその第一音と第三音との間に長三度の音程をなすをもつて長音階の名を有する。そしてその性質は爽快であつて快活な感情を表はすに適してゐる。この長三度の音程は長音階の特質を表はす緊要な音程である。

5. 基礎音階(模範音階)

ハ音を基音とする長音階、即ちハ調長音階の各音は皆**本位音**(オルガン、ピアノの白鍵音)のみで成立する。これを**基礎音階**又は**模範音階**といふ。

6. 嬰種長音階

嬰種長音階

(ト調)

(ニ調)

(イ調)

(ホ調)

(ロ調)

(嬰ハ調)

(嬰ハ調)

ハ調長音階の形に従ひ、ハ音より順次上方五度音を基礎として音階を作るときは、新音階の第七音には常に嬰記號を附し、もつて半音上昇せしめて嬰音となし、そして第八音との間を半音程とする必要が生じて来る。

以上の各種の音階を總稱して**嬰種長音階**といふ。

7. 變種長音階

變種長音階

(ハ調)

(變ハ調)

(變ホ調)

(變イ調)

(變ニ調)

(變ト調)

(變ハ調)

嬰種長音階の構成法と同様にハ調長音階の形に従つて、ハ音より順次下方五度を基礎として音階を作るときは、新音階の第四音には常に變記號を附し、もつて變音として半音下降せしめ、そして第三音との間を半音程とする

必要が生じて来る。

以上の各種の音階を總稱して變種長音階といふ。

8. 長音階の調號

嬰變兩種長音階の構成上その必要によつて用ひた變化記號を譜表の首部音部記號の次に集記したものを調子記號といふ。

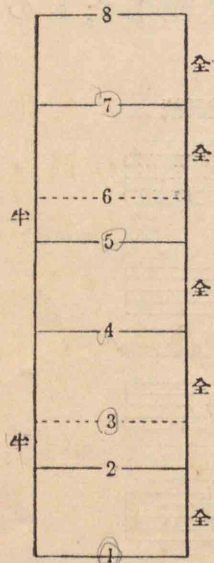
嬰種調號

變種調號

| | |
|-------|-------|
| (ト調) | (ヘ調) |
| (ニ調) | (變ハ調) |
| (イ調) | (變ホ調) |
| (ホ調) | (變イ調) |
| (ロ調) | (變ニ調) |
| (嬰ヘ調) | (變ト調) |
| (嬰ハ調) | (變ハ調) |

9. 短音階及びその性質

八個音の音列中、第二音と第三音及び第五音と第六



音との二箇所に半音程を有し、他は皆全音程を有するものを**短音階**といふ。そして短音階と稱へられる所以は、その第一音と第三音との間が短三度音程をなしてゐるからであつて、この短三度音程はこの音階の特性を發揮する緊要な音程であることは、長音階の時と同様である。

短音階には自然的短音と和聲的短音階と旋律的短音階の三種がある。

(1) **自然的短音階** 本位音のみで短音階の構成される音列は、イ音を基音とせる八音の一系列である。この自然音のみより成るイ調短音階を自然的短音階といふ。

この音階はまた基本短音階、標準短音階ともいはれてゐる。

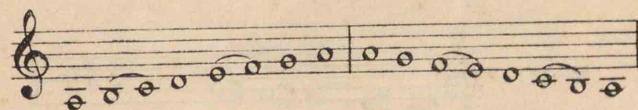
(2) **和聲的短音階** 自然的短音階の第七音を嬰音とし

て第八音との間を半音程とするときは、音階として完全な終了感を與へる。この第七音を臨時記號によつて半音上昇させた短音階を和聲的短音階といふ。そして半音上昇させた第七音は丁度第八音に導くやうな感じがするから、これを**導音**といふ。

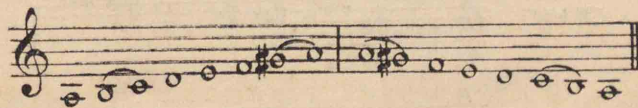
(3) **旋律的短音階** 和聲的短音階の第六音を更に變化記號によつて半音上昇せしめ、下行の際はこの二個の上昇せる音を本に戻して自然的短音階の形に復せしめたものを旋律的短音階といふ。

短音階はその性質陰鬱であつて哀愁の感情を表はすに適してゐる。

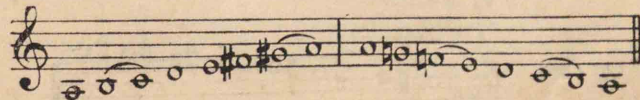
自然的短音階



和聲的短音階



旋律的短音階



10. 嬰種短音階

標準短音階、即ちイ調短音階の形に従ひ、イ音より順次上方五度音を基音として音階を作るときは、新音階の第二音は常に嬰音となる。次の各種の音階はすべて嬰種短音階である。

嬰種短音階

(ホ 調)

(ロ 調)

(嬰ハ 調)

(嬰ハ 調)

(嬰ト 調)

(嬰ニ 調)

(嬰イ 調)

11. 變種短音階

嬰種短音階の構成と同様、イ音より順次下方五度音を基音として短音階を作るときは、新音階の第六音は常に變音となる。次の七種の音階は皆變種短音階である。

變種短音階

(ニ 調)

(ト 調)

(ハ 調)

(ニ 調)

(變ロ 調)

(變ホ 調)

(變イ 調)

12. 短音階の調號

嬰變兩種短音階構成上その必要によつて用ひたる臨時記號を譜表の首部音部記號の次に集記したものをもつて短音階の調號とする。

| 嬰種調號 | | 變種調號 | |
|--------|--|--------|--|
| (ホ 調) | | (ニ 調) | |
| (ロ 調) | | (ト 調) | |
| (嬰ハ 調) | | (ハ 調) | |
| (嬰ハ 調) | | (ヘ 調) | |
| (嬰ト 調) | | (變ロ 調) | |
| (嬰ニ 調) | | (變ホ 調) | |
| (嬰イ 調) | | (變イ 調) | |

13. 長短兩音階の關係

調號を同じうせる(調名にあらず)長短兩音階はこれを關係音階といふ。例へばハ調長音階はイ調短音階の關係長音階、ホ調短音階はト調長音階の關係短音階といふのである。

| | |
|------|--|
| 長調調號 | |
| 短調 | |
| 長調調號 | |
| 短調 | |
| 長調調號 | |
| 短調 | |
| 長調調號 | |
| 短調 | |

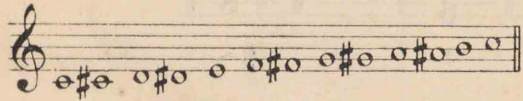
14. 移調

演奏上の都合により、或楽曲を他の調に移して奏唱することがある。これを**移調**といふ。

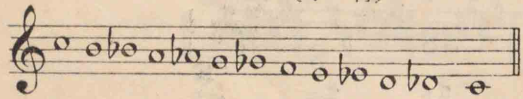
15. 半音階

半音階はすべて半音程のみで成立してゐる。そしてこの音階は音階として何ら始終の感を

半音階 (上行)



(下行)



と與へず、その楽曲中に現はれるときは裝飾的に用ひられるのである。

16. 邦樂調音階

古來より我が國にて朝儀祭祀に用ひる**雅樂**と、民間に行はれた**俗樂**とを一括して**邦樂**といふ。そして雅樂調音階には律旋法及び呂旋法、俗樂調音階には陽旋法及び陰旋法があるけれども、學校音樂には重に雅樂

調の律旋法及び俗樂調の陰旋法を採用してゐる。

(1) **律旋法** は長音階の第二音より始まつて上行同名

| 長音階 | 律旋法 | 陰旋法 | |
|-----|-----|-----|----|
| | | 上行 | 下行 |
| レ | 宮 | ミ | 6 |
| ド | 嬰羽 | レ | 5 |
| ㇿ | 羽 | ド | 5 |
| ラ | 徵 | ㇿ | 4 |
| ソ | 角 | ラ | 3 |
| ㇼ | 嬰商 | ソ | 3 |
| ミ | 商 | ㇼ | 2 |
| レ | 宮 | ミ | 1 |

の音に至る八音の一行と同様であつて、その音名は宮、商、角、徵、羽の五音に嬰商、嬰羽を加へたものである。

(2) **陰旋法** は五音聲より成つて、その第五音は上行と下行とを異にし、長音階の第

三音より始まつて、その第八音に至る音列に等しいけれども、上行のときは第一音及び第五音を缺き、下行のときは第二音及び第五音を缺く。

第五章 和聲論

1. 和聲及び和絃

二個以上の音が相重り、或法則に従つて進行したものを**和聲**といひ、この同時に響く數個音を**和音**又は**和絃**といふ。

和聲に關する諸法則について述べたものを**和聲學**といふ。

2. 三和音

諸種の和音の中、その下層の音より上方に第三度及び第五度に當る二音を有する三個音を**三和音**といふ。そして三和音の下層の音はこれを第一音又は基音或は根音とも稱へ、上方三度に當る音を第三音といひ、上方五度に當る音を第五音といふ。



3. 三和音の種類

三和音はその根音と第三音とのなす音程の長短に

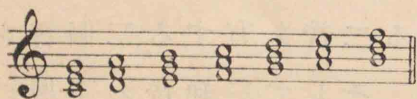
よつて長三和音及び短三和音の二種なほ根音と第五音とのなす音程の増減によつて増三和音及び減三和音の種類に分つ。



4. 長短兩音階各度の三和音及びその名稱

長音階各度の三和音

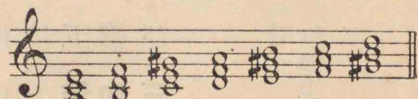
第一度 第二度 第三度 第四度 第五度 第六度 第七度



(長) (短) (短) (長) (長) (短) (減)
主和絃 上主和絃 中和絃 次屬和絃 屬和絃 次中和絃 導音和絃

短音階各度の三和音

第一度 第二度 第三度 第四度 第五度 第六度 第七度



(短) (減) (増) (短) (長) (長) (減)
主和絃 上主和絃 中和絃 次屬和絃 屬和絃 次中和絃 導音和絃

三和音は和音の基礎をなすものである。

なほ四和音及び五和音以上の和音は皆この三和音を基礎として、その上に他の音を附加したものである。

5. 普通和絃

三和音の根音と第三音とは長又は短三度音程をなしなほ又第五音とは完全五度音程の関係にあるときは、これらの和絃を普通和絃といふ。

6. 人聲の區域

樂器の音域は頗る廣汎に亘るけれども、人聲の區域

四聲音部

低音 (バソ) 次中音 (テノール) 中音 (アルト) 高音 (ソプラノ)



男子低音 男子高音 女子低音 女子高音

は比較的狭い範圍内に限られてゐる。そして男女とも各高低兩部に分れ、女子の高音を高音 (Soprano)、低音を中音 (Alto) といひ、また男子の高音を次中音 (Tenore)、低音を低音 (Basso) といふ。

和聲を學ぶには先づこの四聲部より始めるのである。

7. 和絃の重複及び省略

四聲音部の和聲進行において重複に適する音は普

通和絃においては**基音を重ねる**を最もよしとし、これに次ぐは**第五音を可とする**。なほ短及び減和絃においては**第三音を重複し得る**ものである。また省略に適する音は、普通和絃においては**第五音**であつて、多くの場合第一音及び第三音はこれを省略してはならぬ。

8. 和絃の轉回

和絃の根音が最低部になくて、第三音又は第五音の位置にある時はこれを**轉回和絃**といふ。

最低部に第三音が来たときは、これを**第一轉回和絃**といひ、又 $\frac{6}{3}$ (略して6の和絃)ともいふ。

最低部に第五音が来たときはこれを**第二轉回和絃**といひ、又は $\frac{6}{4}$ の和絃ともいふ。第一轉回は三度六度の音程をなし、第二轉回は四度六度の音程をなすをもつて $\frac{6}{3}, \frac{6}{4}$ の和絃といふのである。

9. 和絃進行の三形態

和絃各音の進行に並進行、斜進行、反進行の三形態ある。この三形態は併用されるものである。

10. 和絃進行上の連續に關する法則

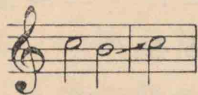
和絃の進行は連續上の法則に従ひ、決して過誤あつてならないことは勿論であるけれども、その連續進行をして更に一層効果あらしめることが肝要である。

(1) 旋律的進行について

- (a) 各聲部は成るべく困難なる音程の跳躍を避ける。
- (b) 各聲部は増音程の進行を成るべく避ける。

- (c) 減音程のあつたときは、次の和絃においてその減音程内にもどること。
- (d) 各聲部は互に交叉することを成るべく避ける。

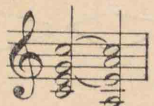
e の例



(e)導音は次の和絢に主調音のある場合は成るべく主調音に上行する。

(2)和聲的進行について

a の例



(a)互に連続せる和絢中に同名の音あらば成るべくこれを同一聲部に残して置く。

b の例



(b)二個の聲部が完全五度又は完全八度の間隔をもつて連続進行することを避ける。

c の例



(c)多くの場合外聲部は並進行をもつて完全五度及び完全八度に進むを禁ずる。然らざる時は隠伏五度又は八度を生ずるからである。

d の例



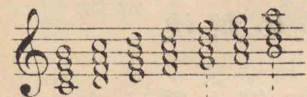
(d)各聲部は何れも互に二度或は七度の間隔をもつて連続進行するを禁ずる。

11. 七の和絢

三和絢の上更に三度音を加へた四個音を七の和絢といふ。通常七の和絢は7の小文字で表はす。

12. 屬七の和絢

音階の第五度の上に立つ七の和絢を屬七の和絢といひ、和聲上屢々用ひられる重要な和絢である。四聲音部和聲ではこれをそのまま適用すべきも、場合によつては第五音を省いて



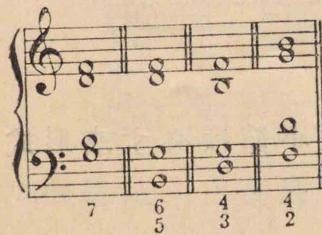
屬七の和絢 減七の和絢

基音を重複することがある。

13. 屬七の和絢の轉回

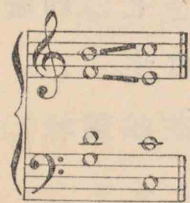
屬七の和絢

原位置 第一轉回 第二轉回 第三轉回



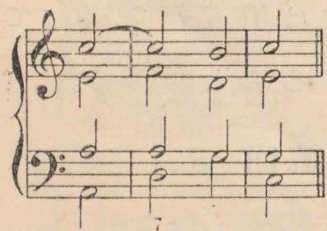
屬七の和絢の第三音が低位置にある時はこれを第一轉回といひ、第五音の低位置にあるを第二轉回、第七音の低位置にあるを第三轉回といひ、各5、3、2の符號をもつて表はす。

14 屬七の和絃の解決



屬七の和絃の第三音と第七音とは不協和絃なるをもつて、これを次の和絃において解決するを要す。通常主和絃に連続して第三音は二度上行し、第七音は二度下行せしめる。

15. その他の七の和絃の解決



屬七以外の七の和絃(減七を除く)の第七音は次の和絃において二度下つて解決されるが、なほその前の和絃において豫め協和音として用意されるものである。

以上述べた和絃の外、なほ九度、十度、十三度、又は和絃以外の経過音などを用いた複雑な諸法則は茲には述べない。

16. 終止法

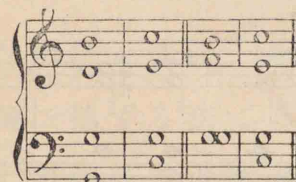
楽曲の段落及び終止などを示す小節は必ず或形式の和絃を用ひる。これを終止法といふ。

(1)完全終止 屬和絃又は屬七の和絃より主和絃に連続し、而も最高最低兩音部に主音の來りて段落又は終結を示したとき、これを完全終止法といふ。

(2)半終止 楽曲の中途に一時的終止をとる時に用ひられて、楽曲の終結には用ひられない。そして屬和絃にて終止を表はすものであつて、この和絃の前には主和絃のあることが多い。

(3)變格終止 次屬和絃より主和絃に連続した終止をいふ。多く完全終止の後に更にまた附加せられ、宗教樂に多く用ひられ、普通の場合用ひられない。

完全終止



半終止



變格終止



擬終止



(4)擬終止 主和絃にて終止したやうな感あれど、實は

六の和絃、即ち次中和絃に至つて終止したものであつて、勿論中間的終止のものである。

17. 轉 調

樂曲はその進行途中に臨時記號を用ひて他の調に轉ずることがある。これを轉調といふ。そしてこの臨時記號が高音部に表はれた時は單音音樂にてもよくその轉調を認め得るも、他聲部に表はれたときは單音進行では容易に知り難いものである。

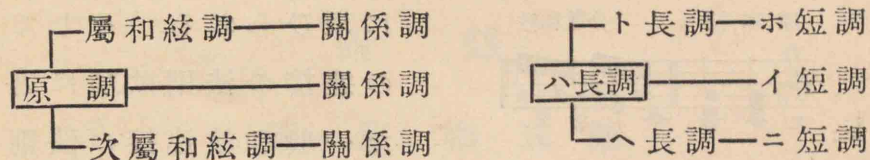
次中音部に臨時記號ある

臨時記號は高音部にある



18. 側 近 調

原調の關係調並に屬和絃、次屬和絃の兩調及びこの兩調の關係調を稱して側近調といふ。



19. 轉調の法則

樂曲は轉調の法則に従つてそのいづれの調にも轉ずることが出来る。併し通常原調に對する側近調に轉ずる場合が最も多い。そのよく行はれるのは原調の屬音の調に轉ずる法であつて、即ち新調の屬和絃もしくは屬七の和絃より新調の主和絃に連續して轉調する法である。



出来る。併し通常原調に對する側近調に轉ずる場合が最も多い。そのよく行はれるのは原調の屬音の調に轉ずる法であつて、即ち新調の屬和絃もしくは屬七の和絃より新調の主和絃に連續して轉調する法である。

20. 分散和絃

和絃を構成する各音を分散して連續的に記すことがある。これを分散和絃といふ。多くは旋律の伴奏

原和絃 分散和絃



に用ひられる。そしてその接続の法則は前に述べた一般和絃接続の法則によるべきものであつて、原和絃に連続などの誤謬あれば分散せる和絃にも亦誤謬を生ずること勿論である。

附 録

第一章 樂式論

1. 樂 式

樂曲を構成する基本材料は皆それぞれ一定の形式に従つて配列せられる。この形式を樂式といふ。

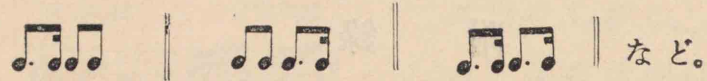
2. 樂曲構成の基本材料

樂音運行して遂に完全な樂曲となるには恰も詩歌文章の單語が集まつて句をなし、句また相連續して章をなしかくて詩歌文章の完全な體型をなすが如く、樂曲も亦樂的小部分の集合より成るものであつて、この樂的小部分を基本材料といふ。

(1) 節奏 小節内における樂音運動の型態(音の長短の配列變化)を節奏といふ。そしてその型態たるや、變化甚だ多様であつて殆ど極りがない。

(a) 四分の二拍子に於ける節奏の例





(b) 四分の四拍子に於ける節奏の例



(c) 四分の三拍子に於ける節奏の例



(d) 八分の六拍子に於ける節奏の例



(2) 動機 動機は樂曲構成の單位型をなすもので、二小節よりなるのが常態である。一小節ではまだ拍子が決定しないから、次の小節に同じ拍子が反復されて初めてこゝに拍子が確立するのである。この動機中の

一小節は部分動機といはれてゐる。

(3) 小樂節 動機が二個相並ぶときは一層整うた構造となる。これを小樂節といふ。小樂節は四小節より

樂曲の基本材料

なるものが多い。



そしてその構造の内容は曲によつて様々になつてゐる。

(4) 大樂節 小樂節が二個相對立すれば大樂節を生ずる。故に八小節よりなるのが本體である。かゝる構造のときには前の四小節を前樂節、後の四小節を後樂節と

稱へる。そして多く前樂節の終は屬音又は次屬音に、後樂節の終は主音上に終止するものである。

3. 樂曲の基本形式

(1) **一部分形式** 樂曲は皆樂節の集合より成るもので、一個の大樂節より成るものを一部分形式といふ。そして多くは八小節より成つてゐる。

(2) **二部分形式** 二個の大樂節より成るもので、多くは四個の小樂節より成る。そして第一大樂節の終は概ね完全終止をなさずして、次の變化に資するため半終止をなし、次の大樂節において完全終止をなす。なほ各小樂節の關係は恰も漢詩七言絶句の體型に類似してゐる。

(3) **三部分形式** 三個の大樂節より成り、多くは六個の小樂節より成る。そして多くは第三の大樂節は第一の大樂節を繰り返すのを常とする。もし第一大樂節の終が主音でない時は、第三の大樂節の終を多少變化させて完全終止を行ふ。

一部分形式

八小節より成るもの

二部分形式

十六小節より成るもの

附加樂節を有するもの

第一小樂節



第二小樂節



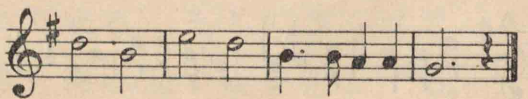
第三小樂節



第四小樂節



附加樂節



三 部 分 形 式

第三大樂節は第一の大樂節を繰り返す



縮小されたる三部分形式



4. 樂曲の諸形式

一部、二部、三部分形式の複合して一層大なる形式を生じ、更にこれが反復、展開、對照、又は挿入句の介在、前奏曲、結尾曲の附加など諸種の變化配列の如何によつて遂に幾多の舞踏曲形式、マーチ形式、ロンド形式、ソナータ形式、或は變奏曲、幻想曲、組曲などを生ずる。

(1) 歌謠形式 (Lied form)

(a) 二部分形式 A + B。

(b) 三部分形式 A + B + A

樂式に於て二部分形式及び三部分形式を歌謠形式といふ。

(2) 複合三部分形式

A……第一部………多く歌謠形式。

B……第二部………トリオ(轉調)

C……第三部………第一段を繰り返す。

(3) ロンド形式 (Rondo form)

A-B-A-|C|-A-B-A

A……第一主題

B……第二主題………(屬音に轉調)

A……第一主題

C……獨立主題……(關係調)

A……第一主題

B……第二主題

A……第一主題

(4) ソナータ形式 (Sonata form)

A……第一部

主題設定部

イ、序奏(なき場合もある)

ロ、第一主題

ハ、第二主題

ニ、短かき結尾曲(なくもよい)

B……第二部

發展部

主題を充分に變化せしめて自由な作曲を試みる部分であつて、轉調に富み、頗る複雑な變化を有す。

A……第三部

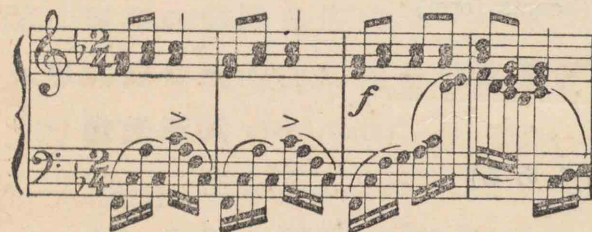
主題反復部

第一主題、第二主題再現し、結尾曲を附す。

Thema. 主題 雀



Var. I.



Var. II.



Var. III.



以下 Var. IX. まであつて結尾曲で終る。

(5) 變奏曲 (Variation)

是一個の歌謠曲、即ち主題の内容を變ずることなく、その發表法(旋律的又は和聲的)を種々變化したものであつて、その變化、編數には別に制限がない。

(6) 組曲 (Suite)

は同調の曲の連鎖したものであつて、往時は舞踏曲の組合であつたが、近世に至り然らざる樂曲をも接合せしめる

ことになつた。

(7) 幻想曲 (Fantasie) は一定の形式的統一を缺き、自由に各種形式の一部を連綴せしめた如き作法である。

5. 重なる樂曲の略説

(1) 聲樂曲

(a) アリア (aria) 抒情的な樂曲であつて、詠嘆調ともいふ。通例三部分形式よりなる。歌劇中の獨唱曲である。

(b) カヴァティナ (Cavatina) 二部分形式より成る抒情的樂曲であつて、伊太利歌劇中にあるものである。

(c) ゴンドリーラ (Gondoliera) ベニスのゴンドラを漕ぐ船頭の謠ふ抒情的の歌であつて、6/8拍子のやゝ緩いものである。

(d) バルカローレ (Barcarolle) 船歌であつて、ゴンドラに同じい。器樂曲に作曲せられる。

(e) ベルセウス (Berceuse) 抒情的な子守歌であつて、多く二部分形式より成り、また搖籃歌的の器樂曲ともなつた。

○(f) **エレジイ**(Elegie) 挽歌とし、又は哀悼追懐の趣を表はすもので極めて抒情的である。

○(g) **マドリガル**(Medrigal) 牧歌ともいひ、戀愛の歌であつて、三、四、五、又は六部より成る精巧な聲楽曲で、伴奏なき合唱によつて、歌はれる。近世に至り、器楽曲に作られた。

○(h) **ロマンス**(Romance) 物語的抒情歌であつて多く歌謠形式より成る。

(i) **バラード**(Ballade) ロマンスより一層抒事的な抒情歌であつて、通例二部分形式より成る。

(j) **レシタティーヴ**(Recitative) 宣叙調ともいふ。歌劇中のアリアに對する臺辭的唱歌である。そして伴奏を附する時と、然らざる場合とある。

(k) **カンタータ**(Cantata) 叙情詩又は物語曲を劇的に作曲した聲楽曲であつて、獨唱、二重唱、合唱、又は器楽曲などより成り、宗教樂にも用ひられる。

(2) 器楽曲

(a) **マーチ**(March) 行進曲ともいふ。多くマーチ形式によりて作曲せられる。そして**軍隊行進曲**(Military

March)、**婚禮行進曲**(wedding march)、**葬送行進曲**(funeral march)など、その他なほ數種ある。行進曲は概して快活なものであり、葬送行進曲は壯嚴で、かつ悲痛哀愁の感情を表はすので、多く第一部は短調を以て構成せられる。

(b) **舞踏曲**(Tanz) 舞踏曲の數は極めて多い。こゝには普通よく知られてゐる數曲について述べる。

1) **シヤコンヌ**(Chaconne) 一部分形式より成る。 $\frac{3}{4}$ 又は $\frac{3}{2}$ 拍子の緩徐な樂曲であつて、低音旋律の上に作された變奏曲である。

○2) **ガロップ**(Galopp) $\frac{2}{4}$ 拍子の急速快活な輪舞曲であつて、小三部又は複合三部分形式である。

○3) **ガボット**(Gavotte) $\frac{2}{2}$ 拍子の高雅なる舞曲であつて、普通半小節より始まる。

○4) **メヌエット**(Menuett) 複合三部分形式であつて、 $\frac{3}{4}$ 拍子の緩やかな高雅快活の佛國舞曲である。そして、舞曲形式の最主要なものとなつて、ソナータ、シィンフォニー中の一樂部に採用せられるに至つた。

○5) **ポルカ**(Polka) $\frac{2}{4}$ 拍子の快活なるポーランド、ボヘミアの舞曲であつて、複合三部分形式である。

- 6) **ポロネーズ**(Polonaise) $\frac{3}{4}$ 拍子のポーランド舞曲であつて、複合三部分形式である。
- 7) **サラバンデ**(Sarabande) $\frac{3}{2}$ 、 $\frac{3}{4}$ 拍子の遅い曲で、カスタネットを用ひる西班牙舞曲である。そして二部分形式より成る。
- 8) **タランテラ**(Tarantella) $\frac{6}{8}$ 拍子の速きナポリの舞曲であつて、二部分又は小複合形式である。
- 9) **マヅルカ**(Mazurka) $\frac{3}{8}$ 、 $\frac{3}{4}$ 拍子の特種の律動を有する熱情の籠れる跳躍的なポーランド舞曲である。
- 10) **ワルツ**(Waltz) $\frac{3}{4}$ 拍子の舞曲。元來獨逸の舞踏曲であつたが、舞踏用ならざる演奏用の楽曲にも命名されるに至つた。そしてソナータ形式以外の諸形式より成る。
- (c) **ロンド**(Rondo) 旋轉調ともいふ。元來佛國民の獨唱と合唱との交互より成る舞曲であつたが、近世器楽曲として作曲され、しばしばソナータの最終樂章として用ひられる。その形式は前に述べたロンド形式である。
- d) **ソナータ**(Sonata) 形式の最も發達した器楽曲であ

つて、通常四個の樂章より成る。第一樂章は快速調で進行し、第二樂章は緩徐調、第三樂章はメヌエット又はスケルツォの快活な舞踏形式を用ひ、第四樂章は通例フェナーレ(Finale、終曲)となつた。そして第一樂章同様快速な速度で進行するものである。各樂章の組織は第一樂章はソナータ形式を主とし、第二樂章は三部分又はロンド、ソナータ、ヴァリエーションなどの各形式を用ひ、第三樂章は複合三部分形式を主とし、終曲はロンド、ヴァリエーション、ソナータの各形式を用ひられる。又第一樂章及び終曲は同一調に作り、中間樂章は側近調を採る。

ソナータはピアノ獨奏曲の外、ヴァイオリンと、ピアノの合奏器楽曲としても多く作曲される。

ソナータ形式の楽曲には次の數種ある。

- 1) **シンフォニー**(Symphony) 交響曲ともいふ。ソナータ形式の楽曲であつて、管絃樂の合奏として作られたものである。
- 2) **コンチェルト**(Concerto) 司伴樂ともいふ。獨奏樂器の特色を發揮し、演奏者の技術を示すため作られた

樂曲であつて、多くは難曲である。形式はソナータ形式で、常に管絃樂の伴奏を附して演奏する。

3) 以上の外、室内樂たる絃樂四重奏樂曲も多くソナータ形式のものである。

4) ソナチーネ(Sonatine) ソナータ樂曲の縮小されたものである。

(e) 幻想曲(Fantasiestück) 次に述べる幻想曲はその構造の上から分類したものでなく、内容の表はす感じの上から、即ち抒情的なもの、物語的なもの、快活な氣分のもの及びその他これに屬せざるものをも併せて述べる。

1) 無言歌(Lied ohne worte)メンデルスゾーンの創作に係はるピアノ曲であつて、極めて抒情的なるものである。

2) ノクチュルネ(Nokturne) 夜の靜かな感情を表はした歌謠體の器樂曲で、ショパンの作品はよく人の知れる所である。

3) ロマンツェ(Romanze) 嚴格な形式音樂に對して反動的に起つた比較的自由的な形式による物語的な樂曲である。

4) ラプソディ(Rhapsody) 狂想曲ともいふ。自由な樂想のままに作られた華麗な器樂曲で、もとは史詩を樂器に合はせて朗吟したことから起つたものである。

5) スケルツォ(Scherzo) 諧謔曲ともいふ。明快な氣分の樂曲で、メヌエット形式によつて作曲する。ソナータ又はシンフォニーの一つの樂章をなし、一種の戲樂として用ひられる。

6) セレナーデ(Serenade) 小夜樂といはれる戀愛的な夕の音樂であつたが、近世幻想的の組形式の樂曲となつた。そして若干の管樂器又は小管絃樂を以て奏せられる。

7) ファンタジイ(Fantasie) 幻想曲ともいふ形式に拘束せられざる樂曲であつて、模倣、改作、拔萃などの方法によつて樂想を自由に表はしたる樂曲である。

8) アンプロンプチ(Impronptu) 即興曲ともいふ。豫め樂譜を用意せず、即興的に演奏する音樂であるが、今は即興的の意義を失つて、たゞ演奏樂曲の標題となつた。

- 9) プレルデーム(Präludium) 前奏曲ともいふ。或樂曲の前奏曲といふ意であるが、近代に於ては獨立して演奏される場合が多い。
- 10) インテルメツォ(Intermezzo) 間奏曲といはれ、歌劇などの幕間に奏せられる器樂曲である。
- 11) オーヴァチュール(Overture) 序曲のことである。歌劇の開幕前に奏せられる管絃樂曲であつて、この音樂によつて歌劇の大意を暗示されるものである。

第二章 演奏論

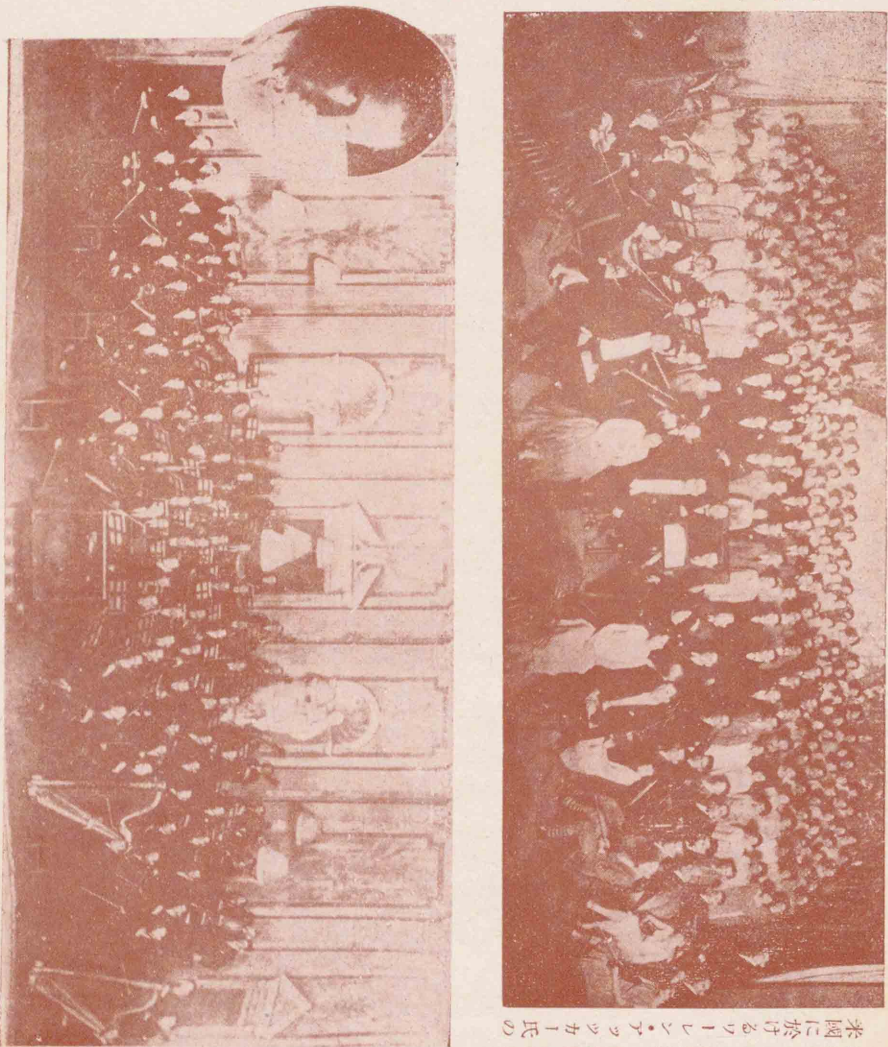
1. 聲樂の演奏

(1) 獨唱 單一な旋律を男聲にても、女聲にても一人で唱ふことであつて多くの場合ピアノ又は管絃樂の伴奏で演出する。そして女聲の高音のときは**高音獨唱**(Soprano solo)、低音のときは**中音獨唱**(Alto solo)といひ、男聲の高音のときは**次中音獨唱**(Tenor solo)、低音のときは**低音獨唱**(Basso solo)といふ。

(2) 合唱 二つ以上の旋律を多人數で唱謠するのを合唱(Chor)といふ。そしてこの多人數は男女の兩聲部に別れて合唱するときは**混聲合唱**(Gemischten chor)といひ、その組織には二部以上五部、六部に亘ることがある。なほ女聲のみの**同聲合唱**(Frauen chor)、男聲のみの**同聲合唱**(Männer chor)とがある。

(3) 二重唱、三重唱、四重唱 男女聲の各聲部が獨唱的に作曲せられた樂曲の各部を各一人づつ集まつて合唱するものに二重唱(Duett)、三重唱(Trio)、四重唱(Quartet)との名稱を附する。

混聲合唱 (上) オークストラ演奏 (下) オークストラ



ナ。指揮者はフリックライネ氏
米國シエンシナツチ市のシノン・オニ・オーケスト

女は獨唱者である。
指揮せるヴェルカの演奏、前面四人の男
米國に於けるワシントン・オニ・オーケストラの

(4) 歌劇 聲樂發表法の最も發達進歩したものは歌劇 (Opera) である。美妙にして、その變化極りなき器樂の演奏及び伴奏の助力をかり、これに舞踊の美、背景衣裳の妙を盡し、而も聲樂發表法のあらゆる諸形式を劇的動作を附して演出する時は、その結構の壯大と表情の激越と樂聲の豊麗とによつて聽者をして實に天上美妙の淨樂界に遊ばしめるやうな感を與へるものである。(口繪参照)

歌劇には**正歌劇** (Opera seria. Grand Opera) と、**喜歌劇** (Opera comique. Opera Buffa) など稱へられてゐる二種類あつて、前者は眞面目で悲壯的な劇であつて全篇殆ど臺詞を用ひることなく、全く音樂を以て一貫してゐる。喜歌劇はこれに反し、滑稽な通俗的な劇であつて、樂器の伴奏なき臺詞を多く交へて居る。従つて正歌劇よりいくらか見劣りがする。

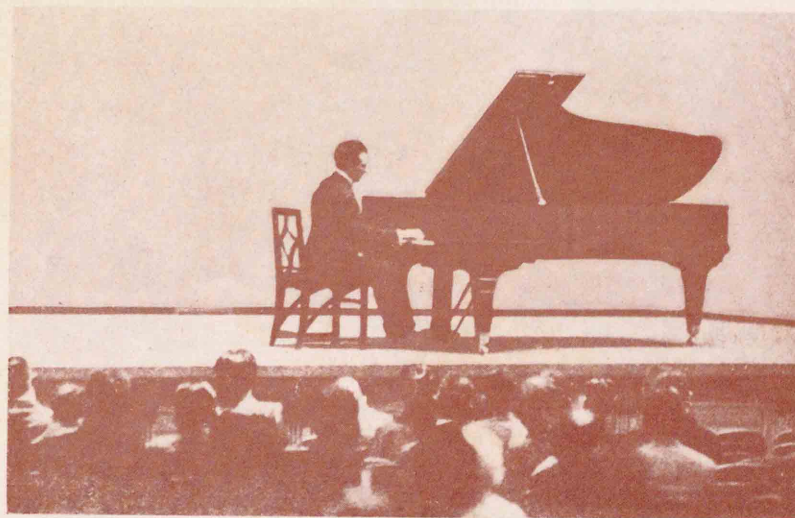
2. 器樂の演奏

(1) 獨奏 (Solo) 一人で器樂(オルガン、ヴァイオリン、ピアノなど)を奏することを獨奏といふ。

ピ ア ノ 獨 奏



大ピアニストとして名あるイグーツ・フリードマン氏の演奏



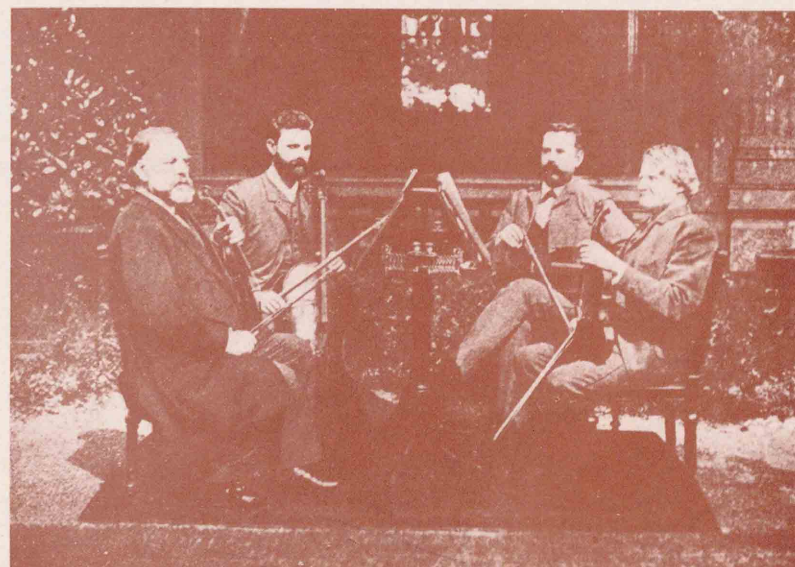
ピアニスト、モイセイウィッチの大阪に於ける演奏

ヴァイオリン 獨奏



ゲザ・ド・クレス氏のヴァイオリン演奏
伴奏はノラード・ウェット・ド・クレス夫人

絃樂四重奏



左側、第一ヴァイオリン……………ヨアヒム教授
同　セロ……………ハウスマン教授
右側　第二ヴァイオリン……………アーナ教授
同　ヴィオラ……………ウイルト教授
（ヨアヒム、クワルテット1890年撮影）

ヴァイオリン(Violin)、セロ(Cello)など単一の旋律を演奏する場合は必ずピアノ又は管絃樂の伴奏を附するものである。併し樂曲によつてはオルガン、ピアノの獨奏でも管絃樂の伴奏を附することがある。

(2) 合奏 小數の樂器で合奏する室内樂には二重奏(Duett)、三重奏(Trio)、四重奏(Quartet)などの外に、なほ吹奏樂器の合奏(Brass band)及び管絃樂器の合奏(Orchestra)などがある。

(a) 室内樂(Chamber music). この合奏には絃樂の合奏最もよく行はれる。

(b) 二重奏 二個の樂器で合奏するもので、ヴァイオリン二重奏(Violin Duett)などはその一例である。

(c) 三重奏 三個の樂器で合奏するもので、例へばピアノトリオ(Piano trio)はヴァイオリンと、ヴァイオロンセロと、ピアノとの三個樂器の合奏である。

(d) 四重奏 四個樂器の合奏である。例へば絃樂四重奏(String quartet)といふのは、即ち第一ヴァイオリン、第二ヴァイオリン、ヴァイオラ、ヴァイオロンセロの四個樂器の編制より成る合奏のことである。

なほ以上の外、五、六、七、八、九重奏などの編制もある。そして吹奏楽器も室内合奏用として用ひられることがある。室内樂の樂曲はその各部に必ず獨奏的に作曲された部分があるものである。

(3) 吹奏樂器の合奏 (Brass band) 軍樂隊の如くフルー、ト、クラリネットなどの木屬管樂器及びホルン、トランペットの如き金屬管樂器、その他太鼓、トライアングルなどの擊奏樂器とより成る多數樂器の合奏である。

(4) 管絃樂器の合奏 (Orchestra) ヴァイオリン系統の絃樂器並に前に述べた木屬管樂器、金屬管樂器、擊奏樂器など多數の集合より成る編制であつて、なほピアノ、オルガン、ハープなどの樂器の加はることがある。そして、この合奏は音樂の内容を最も豊かに發表し得るものであるばかりでなく、一人の指揮者 (Conductor) によつてよく變化の自由と統一の妙とを保ち得て、恰も一人で多數の樂器を同時に演奏するが如き感あらしめ、實に西洋音樂の精隨を極めたものである。管絃樂合奏の大規模の編制では、その人員百名を越えることは珍らしくない。(68頁挿繪參照)

管絃樂合奏に普通用ひられる樂器及びその員數は凡そ次のやうである。

(a) 絃樂器

- 第一ヴァイオリン……………四
- 第二ヴァイオリン……………二
- ヴィオラ……………八
- ヴィオロンセロ……………八
- ダブルバス……………八
- ハープ……………一

(b) 木屬管樂器

- ピッコロ……………一
- フルー、ト……………三
- オーボエ……………三
- イ、ングリッシュホルン……………一
- クラリネット……………三
- バスクラリネット……………一
- ファゴット……………三
- コントラファゴット……………一

(c) 金屬管樂器

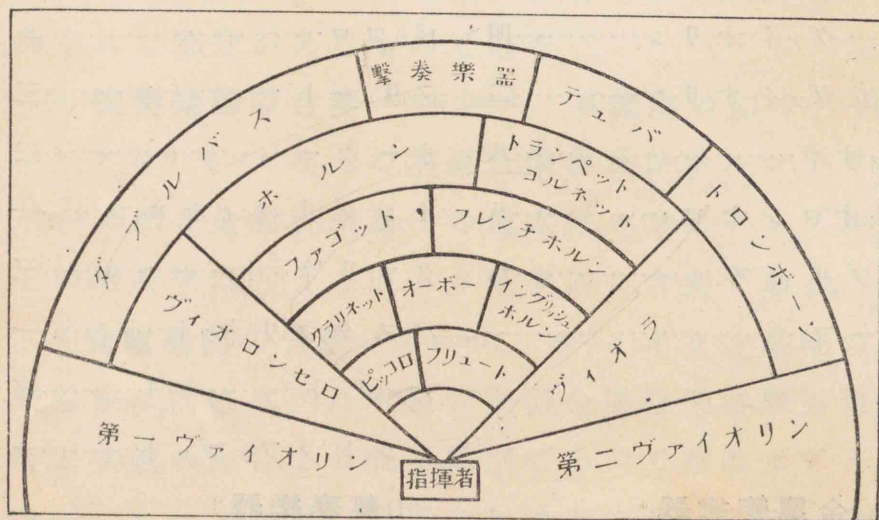
- ホルン……………四
- トランペット……………四
- トロンボーン……………四
- テューバ……………一

(d) 擊奏樂器

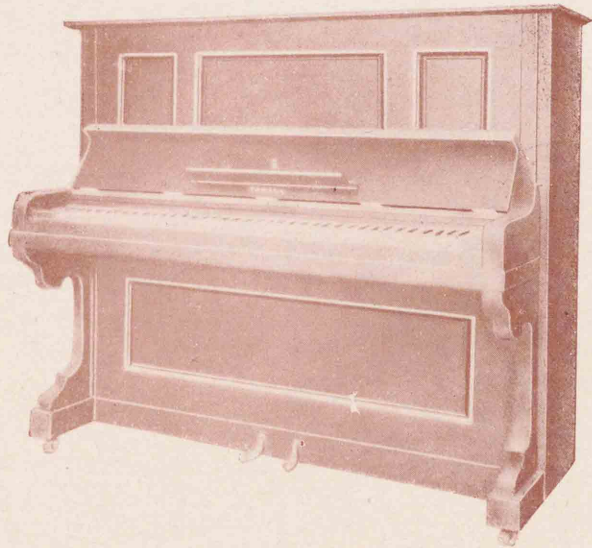
- テンパニー……………三
- サイドドラム……………一
- バスドラム……………一
- トライアングル……………一
- シンバル……………一
- カスタネット……………一

次に管絃樂合奏の各樂器の配列は通例下のやうである。

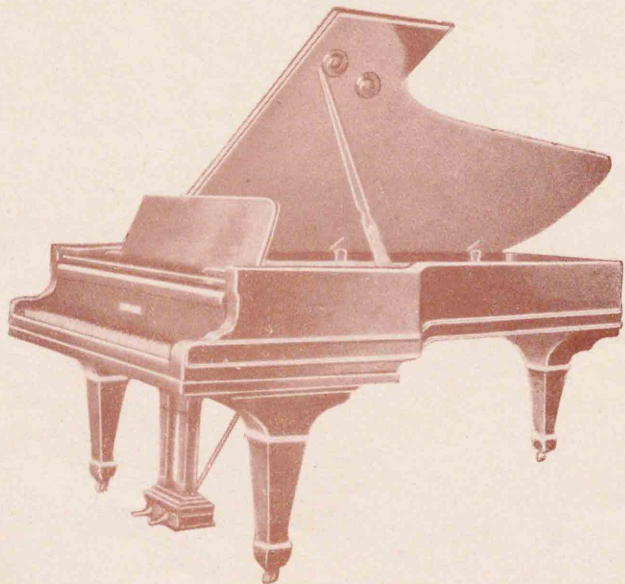
管絃樂演奏の各樂器の配列



ピアノ
アップライトピアノ



グランドピアノ



第三章 樂器論

1. 樂器の種別

樂器はその形狀の差異によつて分類すれば、頗る多數あるけれども、その發音の如何によつてこれを分類すれば(1)絃を振動させて音を出す絃樂器、(2)(3)或装置によつて空氣を送つて簧(Reed)、または管(Pipe)を振動させるオルガン(風琴)の種類、(4)槌(Hammer)または棒にて撃つ擊奏樂器の四種類に分つことが出来る。

本論にはこの四種類のうちで、最も世界的な、そして最も有用な樂器の數種について説明する。

2. 絃樂器

絃樂器には或装置によつて槌(Hammer)をもつて絃を打つもの、弓をもつて絃を擦るもの、また撥で絃を弾いて音を出すものとある。

(1)ピアノ 本來の名稱は(Pianoforte)といふのであるが、通常略して單にピアノ(Piano)と呼んでゐる。この樂器には豎形ピアノ(Upright-piano)、平臺ピアノ(Grand-piano)

などの種類があつて、何れも鍵盤を有し、各鍵は指頭で打たれると、鍵と連続せる槌は巧な構造によつて直ちに鋼鐵の弦を打つて、音が出るやうになつてゐる。

(2) **ハーブ**(Harp) 豎に弦を張つた、數字7字形の樂器で指をもつてはじくこと、我が國の箏に似てゐる。

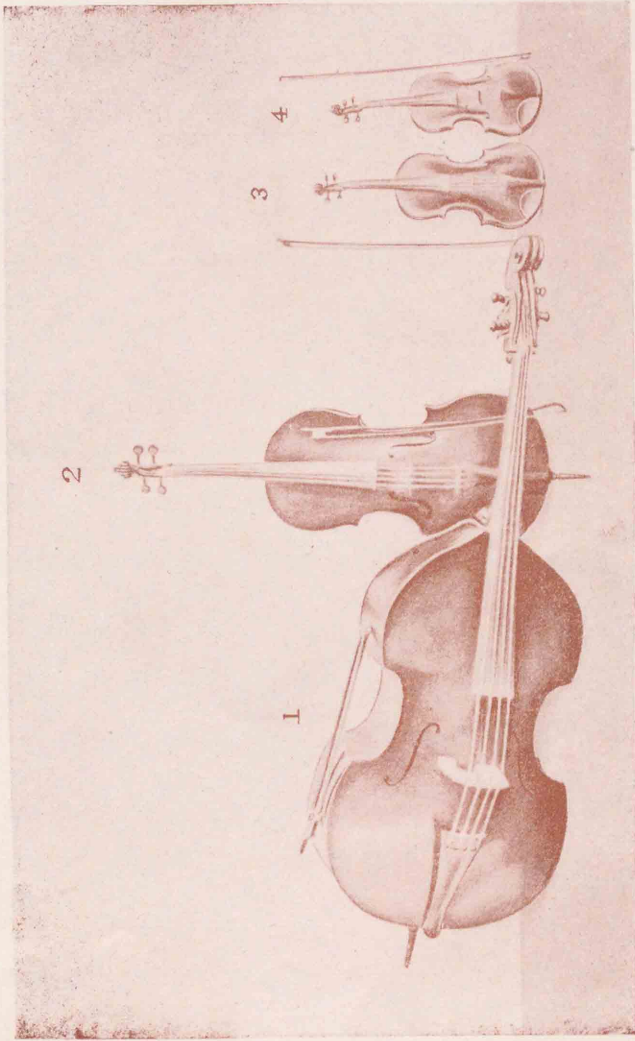
そして弦の數は四十六弦か四十七弦で、二重ペダルのもものが多く用ひられてゐる。古來支那から西洋に渡つたといふことである。我が國にも奈良の正倉院に箏篋といふ樂器が保存されてゐるが、これはやはり今のハーブの前身である。

(3) **ヴァイオリン**(Violin) 絃樂器の内で最高音部に屬する樂器である。その音色幽艶暢明で、最も表情に富み、人聲に近く、強弱の自由、音度の微細を現はすに適し、合奏樂器としても獨奏樂器としても常に樂器の王位を占めてゐる。この樂器も古代東洋にその源を發したやうで、十七世紀の末葉に漸く今日のやうな形に完成したのである。そしてヴァイオリンは四弦を有し、最低の弦はト、次はニ、イ、ホの順に張られ、弦と弦との間は各完全五度の音程をもつて離れてゐる。その奏法は馬

ハーブの演奏



絃 樂 器



(1) ダブルバス (2) セロ (3) ヴィオラ (4) ヴァイオリン。

尾を張れる弓をもつて絃を磨擦して音を出すのである。

(4) **ヴィオラ**(Viola) ヴァイオリンのやゝ大なるもので、その形はヴァイオリンと少しも異なる處がない。また四絃を有してゐることもヴァイオリンと同様であるが調子は各絃ともヴァイオリンより完全五度低い。絃合奏においては常に中音部を奏する。その音色はやゝ幽鬱沈痛の趣あるが、その獨奏の際は一種男性的熱情の迸る感がある。用法は全くヴァイオリンと同一である。

(5) **ヴィオロンセロ**(Violon Cello) は普通セロと呼ばれてゐる。その形はやはりよくヴァイオリンに似て居るが、甚だ大きい。これを奏するには、奏者は椅子に踞し、兩脚の内部にこれを挟み、床上に樂器の下端の棒をつけて奏する。調子はヴィオラよりも八音低い。合奏においては低音部を奏する。音色はヴィオラより一層男性的で、更に一層の幽玄さを持つてゐる。

(6) **ダブルバス**(Double Bass) コントラバス(Contra Bass)ともいつてゐる。管絃合奏においては最低音部を奏する。形状はセロの一層大なるもので、奏者は立つて

これを奏する。奏法は前三者のやうに自由でなく、随つて獨奏樂器として用ゐることは殆どない。調子は高い糸より順次と、い、ほの完全四度の間隔を持つてゐる。

以上の外絃樂器にはマンドリン(mandolin)、ギター(Guitar)などなほ澤山あるがこゝには省く。

3. 管 樂 器

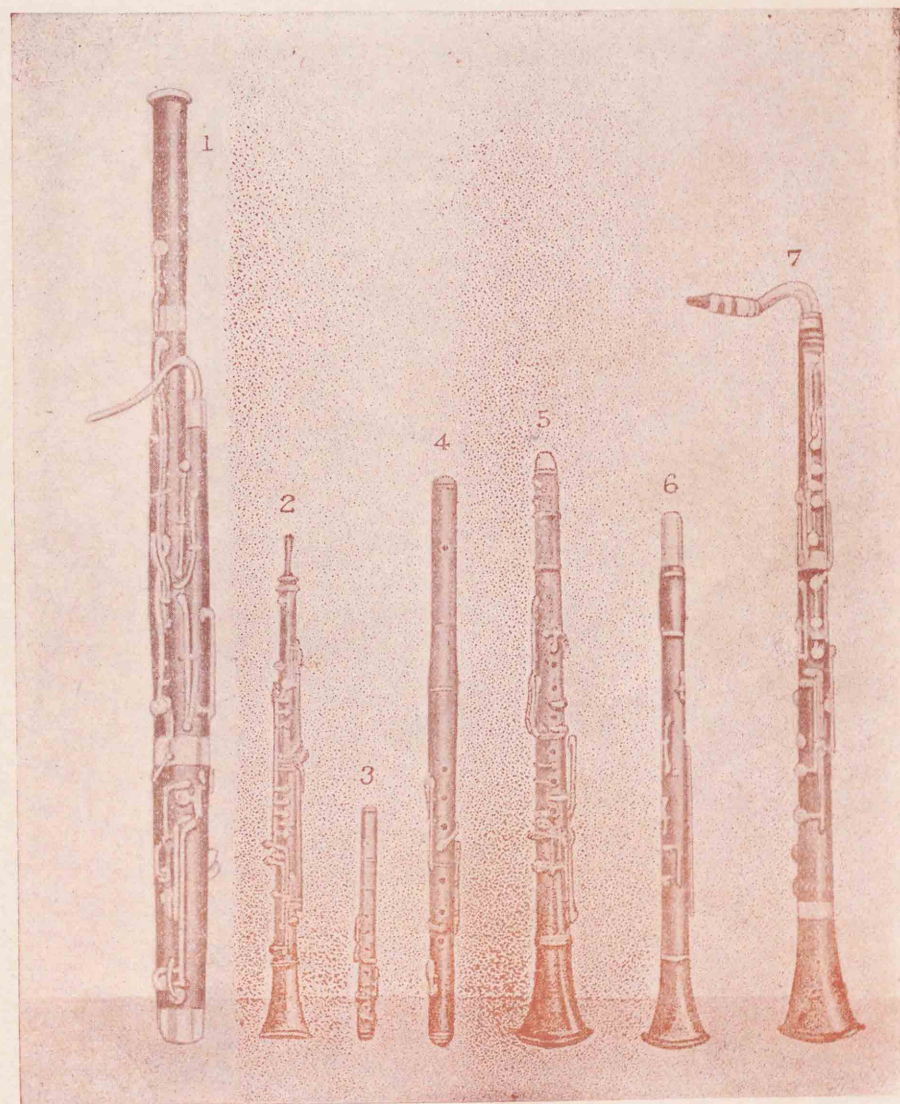
管樂器のうちには木屬管樂器と金屬管樂器とあるがこゝにはそのうちの管絃樂合奏に用ひる管樂器のみについて述べる。

(1) 木屬管樂器

(a) フリュート(Flute) 木製の横笛で、我が國の横笛に似てゐる。音色は清澄明快で和やかな感じを與へる。合奏にはヴァイオリンと同様最高音を奏する。この樂器の一種にピッコロ(Piccolo)といふのがあつたが、フルートと同一の形狀を有して更に小さく、通例フルートより一オクターヴ高い音を奏する。

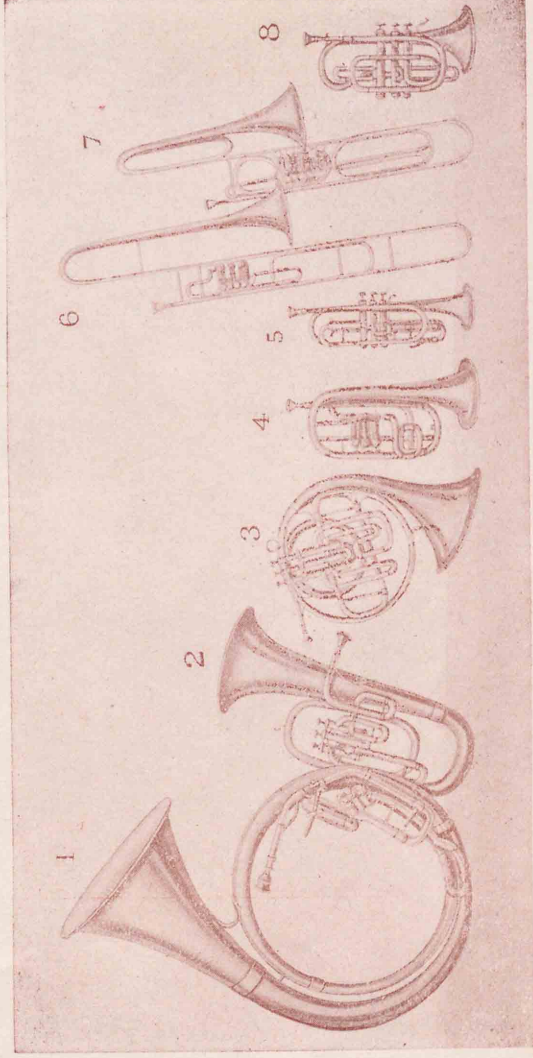
(b) オーボエ(Oboe) フリュートと同じく最高音部を奏するのであるが、二枚の簧を用ひて音を出す吹奏樂

木 屬 管 樂 器



(1)バズーン (2)オーボエ (3)ピッコロ (4)フルード
(5)^bBクラリネット (6)Cクラリネット (7)バスクラリネット

金 屬 管 樂 器



(1) バス (2) ペリトン (3) フレンチホルン (4) ホルン (5) トロンペット
(6) トロンボーン (7) バストロンボーン (8) コルネット

器である。その音色は一種東洋的な色彩を持つてゐて、我が邦雅樂の箏篋に似てゐる。

以上の外**イングリッシュホルン** (English horn)、**バスーン** (Bassoon、又は**ファゴット** Fagott) などトがある。イングリッシュホルンはまたアルトオーボエとも稱して中音部を奏し、バスーンは低音部より次中音部にかけて吹奏する。

これらの樂器は皆口に二枚の簧を有し、その振動によつて音を出すオーボエ屬の樂器である。

(c) **クラリネット** (Clarinet) オーボエと同じく簧を有つてゐるが、その構造を異にしてゐる。そして A. B. C. の三種あつて、各音度 (Pitch) を異にしてゐるが、いづれもその音色は透徹明瞭で、心地よい響を持つ。オクターヴの低い部分を奏する**バスクラリネット** (Bass Clarinet) といふのもある。

(2) 金屬管樂器

(a) **トランペット** (Trumpet) 高音部を奏する樂器であつて、勇壯活潑の音を發し、一種人をして興奮させる趣がある。

(b) コルネット(Cornet) トランペットと同型で、やゝ短い樂器である。音色はトランペットより一層鋭い感がある。

(c) ホルン(Horn) 一名フレンチホルンともいふ。音色は高雅優美で、管樂器中、最も表情に富む樂器である。

(d) トロンボーン(Trombone) オーケストラに用ひる樂器中、最も用途の廣いものである。アルト、テノール、バスの三種あるが、多くテノール、トロンボーンが用ひられる。音色は莊嚴雄大で、その強音を出すことは管樂器中第一である。

(e) テューバ(Tuba) 低音を奏する樂器で、バステューバともいはれてゐる。元來はサクサアントニー氏の改良にかゝるもので、これをオーケストラに用ひたのは近來のことである。

4. オルガン(風琴)

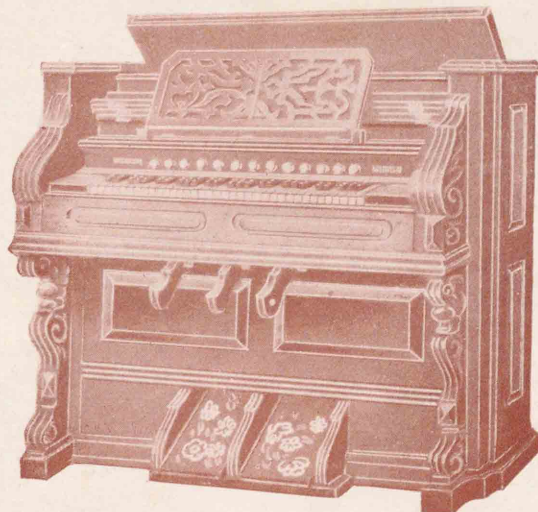
オルガン(Organ) は空氣を簧または管に送つて音を出す特別な構造を有する樂器である。オルガンには

アメリカンオルガン

小型(ベビーオルガン)



大 型



パイプオルガンとリードオルガンの二種類ある。リードオルガンは更にハーモニウム、ペダルオルガン、アメリカンオルガンの三種に分れて居る。

(1) **アメリカンオルガン**(American Organ) 我が國の學校及びまたは家庭に多く採用されてゐるから説明の必要はないが、そのハーモニウムと異なる點は空氣の吸込式に出來てゐることである。そしてオルガン器樂曲演奏には充分のものとはいへない。

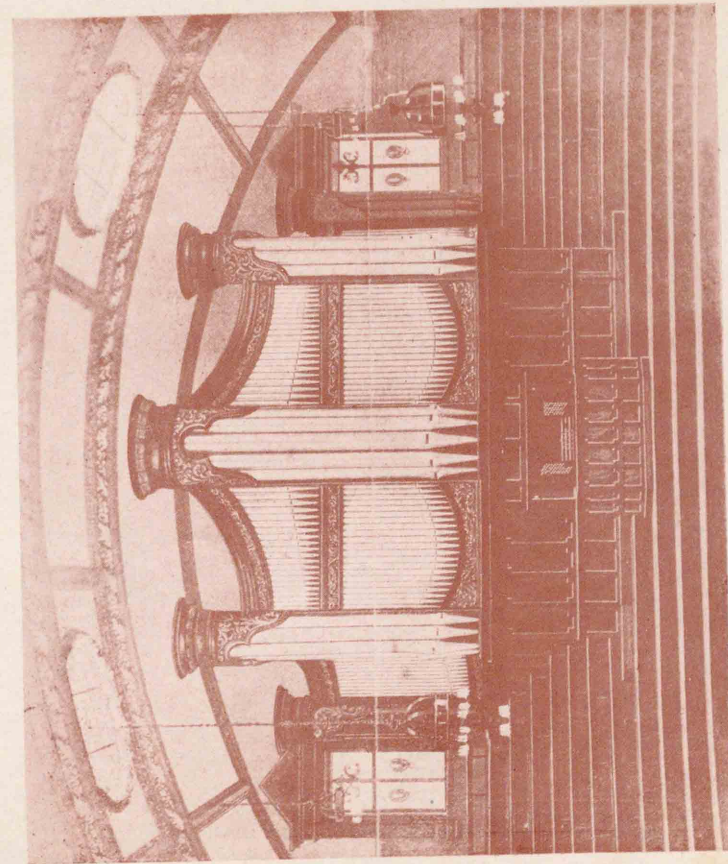
(2) **ハーモニウム**(Harmonium) 外見上アメリカンオルガンと大なる差異はないが、その内部の構造はアメリカンオルガンの吸込式なのとは反對に、ハーモニウムはペダルを踏む度數によつて漸次風袋に空氣を満たし、鍵を押すことによつて空氣が流出するやうになつてゐる。その流出する途中に簧があつて音を出すのである。その音色は到底アメリカンオルガンの及ぶ所ではない。オルガン曲演奏には最も適當したものである。

(3) **ペダルオルガン**(Pedal Organ) このオルガンも外見上は以上二種のオルガンと差異がなく、空氣流出の狀

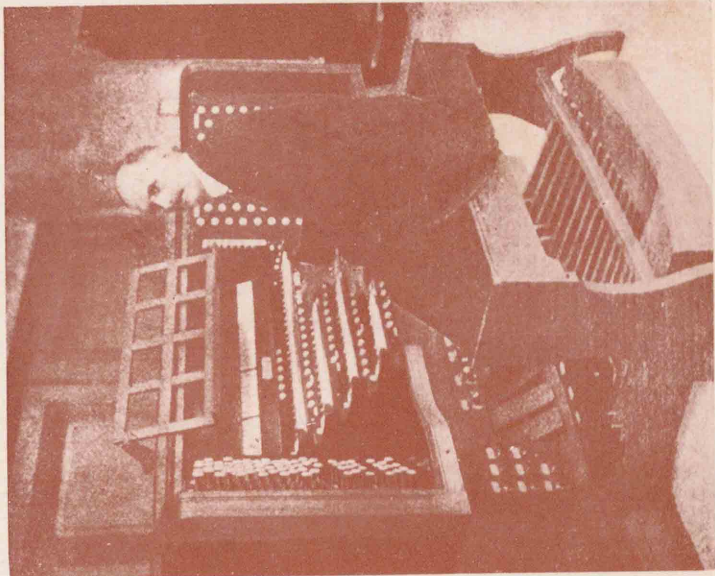
態はハーモニウムと同一である。そのペダルオルガンと名付けられたのは足で奏する鍵盤があるからである。そして手をもつて奏する鍵盤は多く二段となつてゐて、特別な装置で空氣を送るやうになつてゐる。

(4)パイプオルガン(Pipe Organ) 最も完備せるオルガンで、西洋ではたゞオルガンといへば勿論このパイプオルガンを指すことになつてゐる。この樂器は長さ及び太さの異なる數多の管笛を列べ、これに多くは機械によつて送風して音を出すのであるが、この装置が實に大仕掛のものである。大きなものになると、一個のパイプの長さが六十呎を越え、またその太さは直径一呎以上にも及び、そして樂器全體の装置には五六メートル平方以上の地盤を要するとのことである。パイプの數は最も大きなものは五千七百個以上を有し、空氣は多く蒸汽か電氣機關で送り、その音響の遠く二哩に及ぶといふことは全く驚くの外はない。なほその價格に至つては拾萬圓を超過するものがある。パイプオルガンの奏法はペダルオルガンと同様で、數多のストップの作用によつて、恰も一大管絃樂を聴くの想

演奏のそとと(左) 管笛の全量(右)

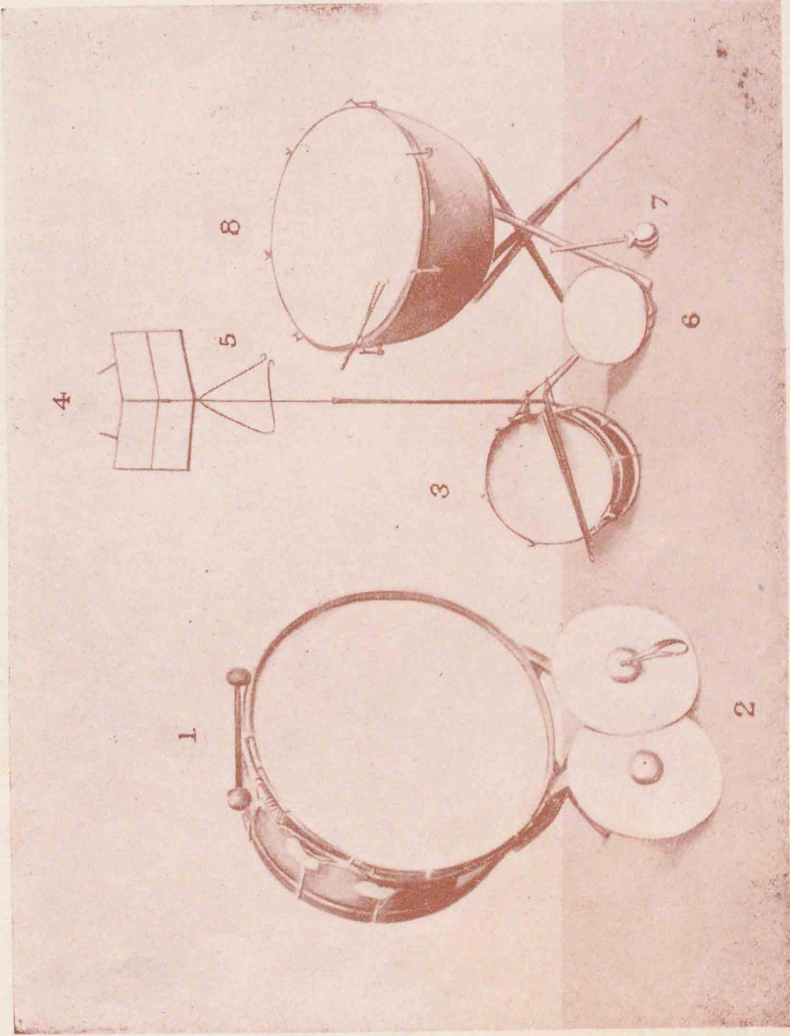


英國ノッティンガムのアールバート、ホールに備付のパイプオルガンで、前面の階段はコロッセウムの階段の位置する所である。中央の大パイプの直下はコンソールである。



クラレンス、ディッキンソンの神學研究所に於ける歴史的演奏の際撮影したもの。演奏者の前面及び左右にある數多の白きストップのものはストップで、鍵盤は四段をなし、腰掛の下にあるのは足で奏する鍵盤である。

撃 奏 樂 器



(1) バスドラム (2) シンバル (3) サイドドラム (4) 譜面臺 (5) トライアングル
(6) タンボリン (7) カステタネット (8) トライアングル

あらしめるのである。

5. 擊奏樂器

擊奏樂器には調子を定め得るものと、音高が不定で調子を整理することの出来ないものとある。以下その主なるものについて略説する。

(1) テンパニー (Tympani) 半球形の鍋状をなした太鼓で、通例大小二個を用ひる。この樂器はその周圍にある螺子によつて調子を定めることが出来るやうになつてゐる。しかし旋律に應じて細かく調子を變化することは勿論出来ない。

(2) ドラム (Drum) 音高不定の軍樂用の大太鼓のことである。この樂器はオーケストラにも用ひられる場合がある。

(3) シンバル (Cymbal) 俗にいふ鑢鉢なつばちの一種でその音は實に煽動的である。現今使用してゐるシンバルは直徑五吋ばかりのもので、銅と銀との合成金屬より成つてゐる。

以上の外トライアングル (Triangle)、ベル (Bell)、タン

ブリン (Tambourine)、カスターネット (Castanet) などもよく用ひられる。

— 終 —

昭和五年三月四日 文部省 檢定 濟
師範學校・高等女學校 音樂科 教科用

發行所

振替東京四六八四番電話京橋五六六番
東京市京橋區京橋一丁目八番地

廣文堂書店

印刷者 川崎 一

東京市京橋區築地二丁目五番地

發行者 大倉 廣

東京市京橋區京橋一丁目八番地



著作者 小笠原 良造

定價 金 六十四錢
現代音樂通論

昭和五年二月二十四日修正再版發行
昭和五年二月二十一日修正再版印刷
昭和四年九月二十五日發行
昭和四年九月二十一日印刷

1982.2.17

湖南文堂書局

湖南文堂書局

湖南文堂書局

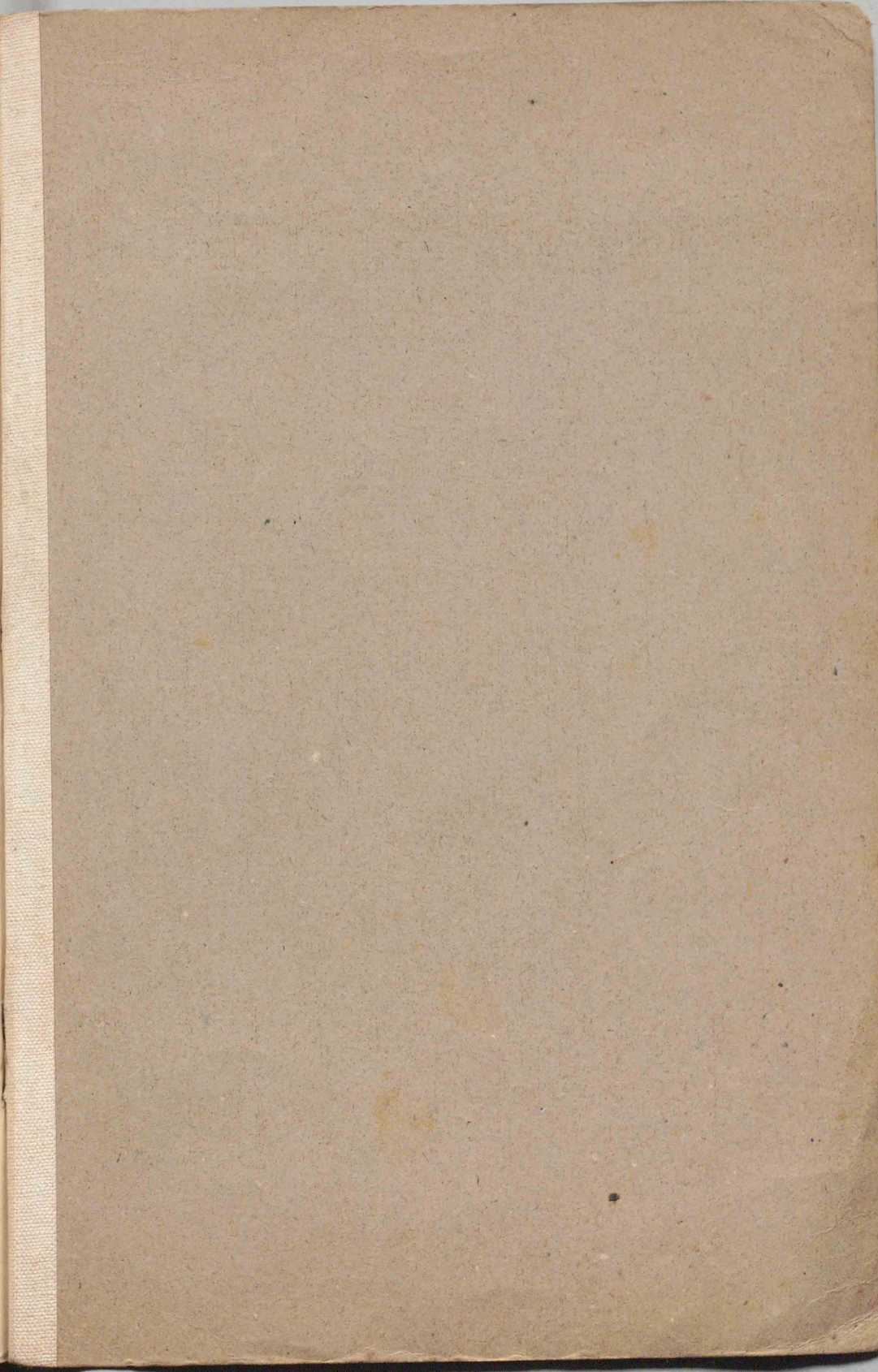
湖南文堂書局

湖南文堂書局

湖南文堂書局



湖南文堂書局



奥野美代子

広島大学図書
0130449400


教科
52-
0130